

大正十二年一月六日印刷 大正十二年二月一日發行

Z32-B88

金の星

才五卷 二月号 才二号

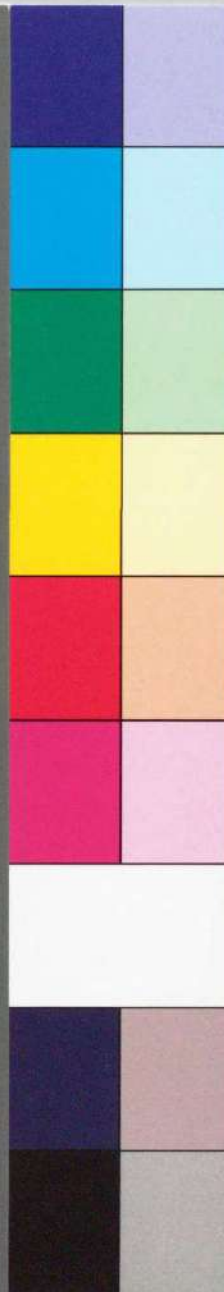


国立国会
8. 3. 26
図書館

inches
cm
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 8

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007. TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



カルピス

お菓子と飲料をかねを

うまくてあた、かい、滋強飲料



販賣所・酒店・食料品店・喫茶店
製造元・ラクトー株式会社

沖野岩三郎先生作

◇ 岡本歸一先生装幀

長篇 物語 父戀し

沖野先生の傑作「父戀し」が少女少女名作物語第一篇として發賣されました處、十萬の「金の星」愛讀者は勿論の事、全國の少年少女の方々から熱狂的の御歡迎を受けまして、最早初版が盡きようとしてをります。今や出版部では大至急に再版の印刷に取りかゝつてをる有様であります。これを以ても、此の本の價値が知れるであります。

ある教師は、これを世界の名作「小公子」や「家なき子」などに比較して、是非愛する少年少女に讀ませねばならぬと言われました。讀者は、父を戀しがつて尋ね歩く、可憐な伊吹子と明治の二人に涙を流しながらも、その間から美しい同情と忍従の美德を養はれるであります。

（附記、長篇物語「父戀し」はかつて「金の星」誌上で紹介されましたが、全部を載せる事が出来ませんでしたので、後篇を添へてこの度單行本として現れたのであります。賣り切れませぬ内に早くお求め下さいませ。）

定 價 壹 圓
送 料 十 錢
箱 六 冊 入 美 本
四 六 冊 入 美 本

東 京 野 公 園 前 下 谷 金 星 出 版 部
東 上 野 公 園 前 下 谷 金 星 出 版 部
振 替 電 話 東 京 一 六 八 一 〇 七 番
番 一 〇 七 一 八 二 番

目次

冬も樂し <small>(表紙・原色版)</small>	岡本 歸一
風のやうに <small>(口繪・三色版)</small>	野口 雨情
霜 <small>(曲譜・童話)</small>	一 野口 雨情
西班牙の山賊 <small>(童話)</small>	四 西條 八十
狐の裁判 <small>(童話)</small>	三 小島 政二郎
後の浦島 <small>(少年自作童話)</small>	三 九田 吉人
敵の打てない熊王丸 <small>(虫談)</small>	三 霜田 史光
山で拾ふた胡桃の實 <small>(童話)</small>	六 若山 牧水
瘤 <small>(入選童話)</small>	三 北田 初子
お城の祕密 <small>(童話)</small>	三 速水 輛之介
つりがね草 <small>(幼年詩)</small>	四 矢倉 チヅ
香爐の行方 <small>(長篇童話)</small>	四 森川 一朗

狸の財布 <small>(童話)</small>	吾 藤森 淳三
水滸傳 <small>(長篇童話)</small>	天 宮島 資夫
和歌の浦 <small>(名所廻り童話)</small>	六 野口 雨情
メンコン蛙 <small>(童話)</small>	七 沖野 岩三郎
賢い裁判官	七 沖野 岩三郎
蜜蜂さん <small>(童話)</small>	天 野口 雨情 選
雨の道 <small>(幼年詩)</small>	天 若山 牧水 選
おばあさん <small>(自由畫)</small>	七 山 本 鼎 選
或日の濱邊 <small>(綴り方)</small>	六 編 輯 部 選
講演の旅より	六 沖野 岩三郎
通信	六
(附 録)	
長篇 物語 鈍栗山 <small>(第一回)</small>	沖野 岩三郎
山 猿	





風のやうに

（白繪）

岡本歸一畫

僕が隙を見て脚でもつかんで引摺り下し、
馬盜坊をしてやらうと傍へよると、彼は無理
に拍車で馬の横腹をけつとばした。彼と馬は
風のやうに、あとに一煙の砂塵を残したま
駈けだして行つてしまつた。

（スペインの山賊の九頁を御覽下さい）



野口雨情先生著

本居長世先生作曲
岡本歸一先生挿畫

作曲音譜十一曲
挿畫數葉入り

賜台覽
童謡集

十五夜お月さん

第十版
定價 金一圓
送料 金十錢
來出 卅五錢

作曲音譜
大増補

童謡を作り又は謠ひ讀みつゝ有る讀君の中に未だ
本書を見ざる者ありとは思はれず。本書は文部省
認定の最も最高權威ある童謡集として推薦す。

西條八十先生著
童話不思議な窓

何人をも追隨を許さざる先生の哀艶限りなき童話集也
四六版特上製 金一圓八十錢
送料十五錢

水谷まさる先生著
少女詩の作り方

新らしき詩の作り方案内書として是非一度御覽なさい
中形版上製 定價八十錢
送料十一錢

野口雨情先生著
童謡作法問答

新しい童謡の作り方は本書約三百頁の中に委しく記さる
中形版上製 定價金一圓
送料十三錢

東京市猿樂町七十番 交 社 蘭 發 賣 振替東京四〇二七九番

てい開がんさ皆
い白面番一



ンホノボツニ

ド一コレ印鷺

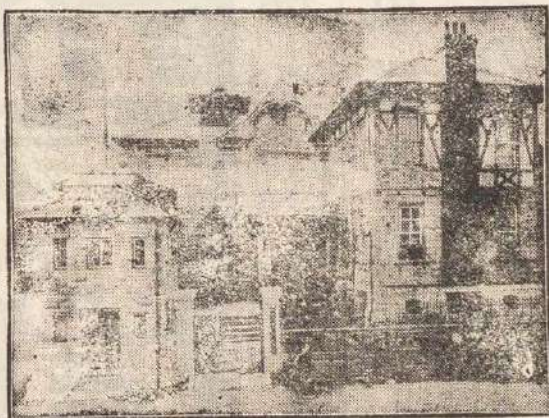
會商器音蓄本日會社

天下の青年は
何故に争ふて
大日本國民中學會に入會する乎

- 講義が新しいから
- 會費が廉いから
- 指導が良いから
- 學制が正しいから
- 基礎が固いから
- 講師が善いから
- 卒業が早いから
- 成功が憊だから

會長 尾崎行雄

學監 文部博士 遠藤 謙吉
新渡戸博士 山内 榮雄
顧問 井上博士 浮田 博士
岡田前文務大臣



◎創立以二十一年
記念大特典提供
目下新學期開講
入會の絶好機

講義録見本つき
規則書無料進呈

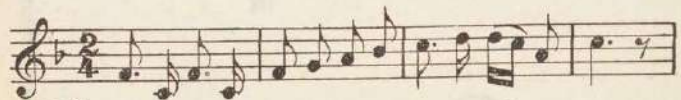
一人前の男となるには
どうしても中等教育を受けなければいけない。中等教育の學力のない者はどうしても生存競争の勝利者たることは大ケしい。併し家庭の事情で中學に入れない者も決して失望するには及ばない。中學校に行かずに中學卒業同様の學問をする方法がチャンネルと出来てゐる。それは創立以來二十年の古い經驗のある講義録で有名な大日本國民中學會の通信教授法である。

東京駿河臺(お茶の水)電車通り、
大日本國民中學會
振替東京四二〇〇 電話 神田三〇〇〇二
神田三〇〇〇三
神田三〇〇〇四



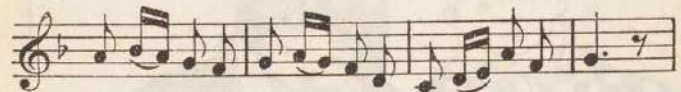
霜 柱

本居長世作曲



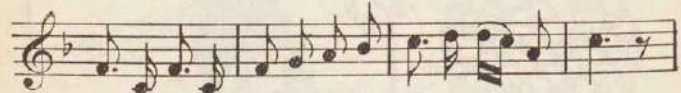
1. 5 1. 5 | 1 2 3 4 | 5. 6 6 5 3 | 5. 0 |

サク サク ふん だふん だ し も ばー し ら



3 4 3 2 1 | 2 3 2 1 6 | 5 6 7 3 1 | 2. 0 |

す すー め に ふ まー せ て あ そー ば せ よ



1. 5 1. 5 | 1 2 3 4 | 5. 6 6 5 3 | 5. 0 |

ふん だふん だ サク サク し も ばー し ら



3 4 3 2 1 | 2 3 2 1 6 | 5 6 7 3 2 | 1. 0 ||

す すー め も ふ みー ふ み あ そー ん で る

◆◆ロビンソン博士原著◆◆奥俊郎氏譯註◆◆

最新刊

結婚と優生學

ロビンソン博士は米國ブロン大學病院長として且雜誌批評と指導の主幹として結婚問題に對する人道主義的社會改良學者である。本書は章を分つ三十章醫學上專問的知識を根據として結婚問題に解決を與へた名著であつて本書はその第十五版の全譯である譯文亦流暢適確苟も人生の幸福結婚問題に思ひを致さるゝ諸子の必讀せられむことを望む。

四六判上製紙數二百二十餘頁金文字
定價壹圓二拾錢
送料 六 錢

遠藤しげの女史作

秋田雨雀先生序

四六判二百八頁口繪地獄見物外五葉
定價金壹圓 送料 六 錢

江口千代子女史作

口繪河上挿畫十葉 裝畫武井武雄氏
四六判 紙裝 二百二十頁
定價金壹圓貳拾錢 送料 四 錢

江口千代子女史作

童話集 不思議なじじょう
桃色の王女
少女對話集

不思議などどうを始めて電氣國旅行など一話の物語を考へるに面白く新刊書です。長編童話桃色の王女外十篇を集めたもの若草の箱のやうな神話と若草のやうな感懐が交へ無氣な優い麗しいお話のみで好むの新しいお話です。學藝會の餘興としてふさふさの十二篇の對話を集めたもので読んで面白く演じた。適した趣のある演じに良

發行所 東京市麻布區新網一丁目二番 竹内書店 取賣全書 國次店

霜柱

野口雨情

ザツク ザツク

踏んだ

踏んだ

霜柱

雀に

踏ませて



遊ばせよう

踏んだ 踏んだ

ザツク

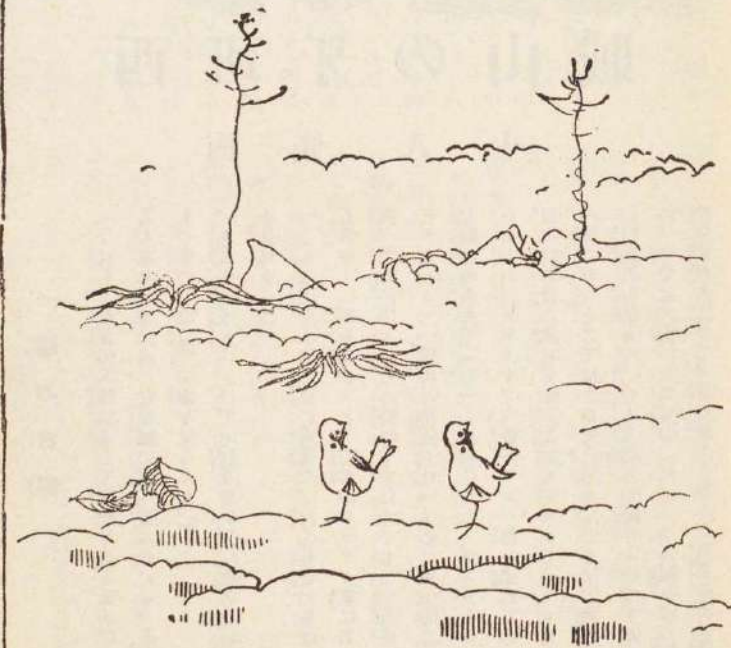
ザツク

霜柱

雀も

踏み踏み

遊んでる





西班の山の賊

西條十八

一 蹶の古傷

「今夜もまた昔の手柄話をして聞かせろと云ふのか？
よし来た。ではみんな暖爐の傍へ寄るがよい。そして
まづ僕のこの蹶の傷を見るんだ。」
老大佐は燈火のかけで毛脛をむいて、その古い傷痕
を見せました。

こゝは巴里にほど近い田舎で、村の若者たちはいつ
ものやうに話を聞かうと、粉雪のサラサラ窓にあたる
夜、老大佐のところへ訪ねて来たのでした。大佐はも
とナポレオン一世のお傍近く仕へてゐた勇士のなかで
も、撃剣の名人で「鬼」と稱名された、デエラールであ
りました。ナポレオン大帝がエルバ島を逃れての二度
目の旅あけに成功せず、またもやセント・ヘレナの島
へ流され、そこではかなく亡られてからは、大佐はこ
の田舎に引込んで、ひとり淋しく晩年を送つてしまし
た。今では大佐にとつての、たゞ一つの楽しみは、折々
村の若者を集めて、昔自分がさかんに戰場を駆け廻つ

てゐた頃の愉快な手柄話をして聞かせ、またそれと共に偉か
つたナポレオン大帝の偉を偲ぶことでした。――

「どうだ。ひどくそこが凹んでゐるだらう。これは忘れもせ
ぬ千八十年の六月、僕が大帝の命をうけて西班牙へ出征し
て、ピレニースといふ山の麓でイギリス兵と戦つてゐたとき
のことだ。或る日路はたの藪からだしぬけに槍が出て、こん
なにひどく足に怪我をさせられたばかりか、大切な馬まで斃
されてしまった。災難はそもく、それがもとで始つたのだ。」

そこで僕の身體はアラモといふ村の或る百姓家へ搬き込ま
れて、近所の醫者の療治を受けたが、傷は骨まで届いてゐる
のでなかく、急には治りさうもない。もつとも最初のうちは
仲間の怪我人がおなじ家に三人も居たので、世間談やカルタ
などをして退屈もせず日を暮してゐたが、ほかの連中の傷は
ほんの淺手だから追々なほつて戦地へ出かける。あとには僕
ひとりが置きざりにされてしまつたのだ。

その後一日二日は獨りほつちで辛抱してゐたが、三日目と
なるともう義理にも我慢がしきれなくなつてしまつた。僕の

眼には、頭を失した部下の兵卒共の、淋しうな姿ばかり
が浮んで来た。その時分僕は隊でもいばん年少の中尉だつ
たが、まだ妻子の無い身だけに部下の兵卒があらやくちやに
可愛くて仕方が無かつたのだ。僕は指を噛み、頭の毛を掻き
捲つて、――白狀すると、大粒の涙をボロボロこぼしてまで
胛甲斐ない身を嘆いた。

その擧句が或る天氣のカラリと晴れた朝、僕はせめてもう
二三日といふ強つての醫者の勸告をふり切つて、無理にその
百姓家を飛び出し、跋ひきひき村はつれの一軒の宿屋へとや
つて来た。

「おい、おやちさん、この邊に馬が無いだらうか？」

僕が入るなり宿の亭主に訊ねた。

「馬ですか？御座いませんよ、一頭も。先日中残らず徴發さ
れてしまひましたからな。」

亭主は足の不自由な僕の姿をジロジロ見ながら氣の毒さう
に答へた。大凡は覺悟を定めてゐたものゝ、僕はこの返事を
聞いて少なからず愴氣でしまつた。黙つて宿屋の前の往來に
立つて、行手の山の姿を眺めてゐた。

久瀧で身に浴びた西班牙の朝の日光はどんなに氣もち快かつたらう！それにしてもつい昨夜のことだつた。僕は味方の軍勢がこの山の直き向側まで來てゐて、そこで英國軍と對陣してゐるといふ噂を聞いた。して見るとこゝから二十里と離れぬつ鼻のさきに我軍は居るのだ。しかもそこへ行く術が無いとは！僕は危く地輪を踏みさうになつた。すると、宿屋の亭主が中から聲をかけた。

「軍人さん、馬があつたところでもお一人ぢやあこの山越は難かしようございますよ。なにしろこの峠にや、エル・クチロといふ、名代の山賊が巢を喰つてゐて、夜晝の別なく通行人に害をするんで、よつほど無遣砲な人でなけりや今日び通らないことになつてゐるんですから。」

この話を聞いて僕はフアンと鼻で笑つた。苟くもナポレオン大帝のお傍近く仕へる佛蘭西の軍人だ。西班牙の山賊風情にひけをとつてどうな

るんだ、と威張りたくなつたが、それにしても乗物は、考へ及ぼすと直ぐにギヤフンとしてしまつた。

そこで亭主に返事もせず、また黙つたなり腕拱いて考へてゐると、うしろの方で寔々といふ馬の蹄の音。慌て、振顧ると、向からひとりの士官が黒馬に跨つて急いで來るのだつた。

「君、待ちたまへ！」

僕は近づくなり聲をかけた。見ると青色の軍服を着て、口髭の美しい、立派な體格をした青年少尉だつた。

「はッ」



僕を見るなり、彼は馬上で舉手の禮をした。
「僕は第二十三聯隊のジエラル中尉だ。負傷のため約一個月この村に滞在してゐたが、これから本隊へ歸らうと思つてゐるんだ。」

と、僕は云つた。

「私は兵站部のヴィダル少尉です。これからバストオルへ參るところです。もし上官がお出になるのでしたら幸ひ御伴いたしたいものです。この峠には山賊が居つて危険だと聞きましたので。」

少尉は喜しきうに云つた。

「いや、ところが僕には馬が無いのだ。で、相談だが君その馬を一才僕に貸して呉れんか。僕が本隊へ歸れば直ぐにその馬につけて、君の護衛兵を寄來すが。」

僕は巧みに相談を持ちかけたが、少尉は聞き入れさうにも無かつた。そこへ宿屋の主人も出て來て、山賊エル・クチロの兇暴なことをしきりに説き、僕もともく、口を添へて年若な身で無謀なことをせずと、すなほにこゝで護衛兵の來るのを待つやう、繰返し勧めたが、血氣壯な彼は首を掉つて頑と



して應じなかつた。

「ではいゝさ君の思ひ通りに行くことにするさ。だがまあ一寸下りて僕と一杯やつて行かないか？」

僕は最後の策としてともかく彼を馬から引き下さうとしたが、彼はすばやく僕の眼色を讀んだらしかつた。で、僕が隙を見て脚でも搦んで引摺り下し、馬盜坊をしてやらうと傍へ寄ると、彼は矢庭に拍車で馬の横腹を蹴つとばした。と、

「アッ」といふ間もなく、彼と馬は風のやうに、あとに一櫻の砂塵を残したまゝ駈けだして行つてしまつた！



二、怪しい托鉢僧

その時の思々しき、口惜しき、腹立たしき！ 僕は兩方の拳を握しめたまゝ、いつまでも奴の後姿を見送つてゐたよ。

すると、だしぬけに耳もとで、

「軍人さん、では私がひとつ乗物の御心配をさせようかな。」と云ふ者がある。

驚いて見ると、黄ろい顔をして、春のひくい坊さんだ。先刻僕が宿屋の店へ入つたときに、土間の隅で脚絆か何かの破れをせつせと繕つてゐた托鉢坊主、それが何時の間にか出て来て傍に立つてゐたのだ。

「君が？ ほんとに心配して呉れるか！」

僕は思はずその坊主の肩に手をかけた。と、途端に何しろ蹠が利かないもんだからヨロ／＼として、坊さんとも／＼危く地面へ轉りさうになつた。

「頼むからバストオルまで僕を届けてくれ。さうすれや君に黄金の珠数を進呈するぜ。それは僕がスピリチュ・サントの寺で手に入れたものだ。立派なものだぜ。僕が持つてゐるは

何の益にも立たないものだが、君等にとつちやそりや大したものだ。」

僕は叫んだ。

「なにそんな御心配には及びません。私は禮なんぞ欲しくするんちやありません。お困りの方に親切を盡すのはもともと私ども出家の役ですから。」

かう托鉢僧は氣輕に答へて、スタスタ先に立つて歩き出した。

やがて坊さんは僕を一軒の汚ない牛小屋へと案内した。見るとそこには毀れ掛つた一臺のガタタリ馬車があつた。それから三頭の老はれた驢馬（驢馬と馬との合の子）が繋いであつた。坊さんの話によると、一頭一頭ではどれにも馬車を曳くだけの力は無いが、三頭總がかりとなればどうにかかうにか曳いて行かれるだらうとの事だつた。

この瘦せこけた化物のやうな驢馬の姿も、その時の僕にはいつぞやフォンテンブローの陛下の御厩で見た二百二十頭の獵馬より頼もしい氣がしたのだつた。

十分経たぬ間に、驢馬の持主はこの三頭を馬車につけてし

まつた。だが、もとよりあまりいゝ顔をしてゐなかつた。

彼はやはり山賊エル・クチロを甚く恐がつてゐるのだつた。

それでも一方僕が「褒美の金はいくらでも出すから」と持ちかける。そばから坊さんが又「かう云ふ時困る人を助けな」と地獄へ落ちるぞ」とおどかすので、やう／＼手綱をとつて御者臺へ坐つた。

もうかうなれば占めたものだ。僕はやつと胸を撫で下した。御者殿は、物騒な峠で日でも暮れては一大事といふ懸念からやたらに馬に鞭をくれて、まつしぐらに田舎道を走らせるのだつた。

黄ろい顔の小さな坊さんは、中々氣の輕い、口まめな面白い男だつた。途々僕が退屈しないやう、しきりと珍らしい世間話をして聞かせるのだつた。僕もその返禮にいろ／＼戰場の功名談などをして聞かせた。が、たゞ、よつほど氣をつけて話を進めないと、この坊さん、顔る氣が弱いと見えて、些しでも、血みどろがかつた話になると、さも／＼恐ろしさうに身を凍め、何とも云へない苦しさうな表情を顔に浮べるのだつた。



話によるとこの坊さんは遙々北西班牙から生れた村を訪ねにやつて来たのだと云つた。其村はやはりバストオルの近在で、そこには老つた母親がひとりほつち、今日にもかれの歸りを待ちわびてゐるのださうだ。その小さな村の家庭の話や久闊に母親と逢ふ喜びの話などを聞いてゐると、僕も急に自分の村のこと、老つた母親のことなどを憶ひだした。さうしておもはず涙が眼にあふれさうになつた。なんとなくこの道づれの坊主が懐かしく、他人と想へない様な氣がして来た。坊さんは、まるで赤坊のやうにもの珍らしさうに僕の軍服を眺めたり、ひねくつたりした。帽子の羽根がざりに感心したり、腰のサアベルを悉くいぢくつて見たりした。僕は面白半分サアベルをスラリと抜き放つて、これでどんな工合にして何人の敵を殺したか話しかけると、坊さんは両手を合さんばかりにして、どうかそれをもとの鞘に收めてくれ、さもないと見たゞけで氣分が悪くなるからと、しきりに額むのむのむつた。

そのうちに馬車は追々と峠に掛つて来た。路はだん／＼と狭くなつて来た。兩側は切立つたやうな礫土の崖で、今しが

た窓から見えてゐた遠い平野の景色も、まるで隠れてしまつた。

話にも倦きて、僕は腕組をしたまゝ、いろ／＼な物思ひに耽つてゐた。いまの坊さんの話から憶ひだした故國のことや、部下の兵卒どものこと、それから昨夜まで滞在してゐた田舎家の親切な妹娘のことなどを、それからそれへと、うつらうつら考へてゐた。

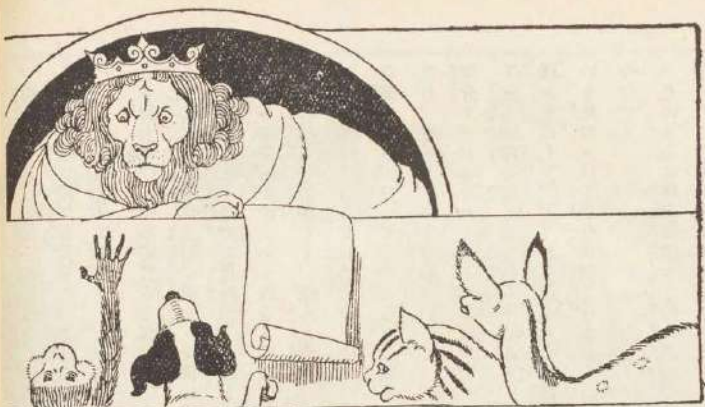
そのうちふと相手があんまり靜かなのに氣がついて見ると坊さんは喉が乾いたと見えて、胸の頭陀袋から水筒をとり出したが、その栓になつてゐるコルクが、飲つたきりとれないので、一本の錐を出してしきりにコツコツやつてゐるところだつた。自分もチツとその手もとを見つめてゐた。

やがてコルクはどうやらかうやらうまく錐の先について出て来たが、スポリと抜けるはずみ、コロコロと僕の足もとへ轉り落ちた。

僕は何心なくそれを拾ひ上げようと腰を屈めた。すると、どつたらう！ 坊主は物をも云はず矢庭に僕の肩へ飛び掛つて、その錐を僕の目玉へと突き込んだ！ (つゞく)

狐の裁判

小島政二郎



昔、ノベルといふ獅子が動物の王さまだった頃のことでした。その頃は、動物の仲間にも、年々一回づつの寄り合ひがありました。その寄り合ひは、來年することを相談するばかりでなく、今年ちゆうに起つたことの善悪を極める時でもありました。例へば褒められるものは褒められるし、叱られるものは叱られるし、罰せられるものは罰せられる時でした。で、この寄り合ひには動物といふ動物がみんな集まりました。ところが、ライネツケといふ狐だけは出て來ませんでした。それと云ふのは、今年ばかりでなく、いつも悪い事のし續けたつたので、出ればどんな目に逢はされるか分らないと思つたからでした。

案の定、その年の寄り合ひには、ライネツケに對する攻撃で大變でした。誰も彼も、ライネツケを悪く云はないものはありませんでした。中でも、一ばん激しくおこつてゐるのは、イセグリムといふ狼でした。

「ノベル大王に申し上げます。私は三人の子供を、憎いライネツケ奴のために、生まれもつかぬ旨にされてしまひました。そればかりか、妻までひどい目に合はされました。どうかライネツケ奴をきびしくお罰して下さい」

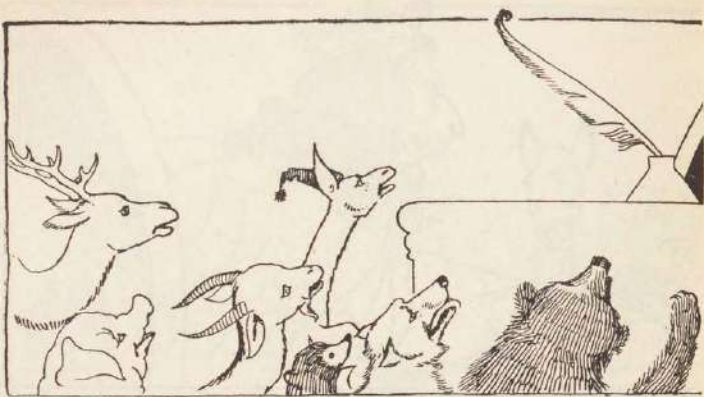
かういふイセグリムの尾について、ロスといふ犬が立ち上つて「ノベル大王に申し上げます。私もライネツケ奴にひどい目に合はされました。或日お腹がペコ／＼に減つてをりました時、いゝ鹽梅に、森の中で腸詰を見つけて來やれ嬉しやと思つて食べようとする時、横あひから突然ライネツケが飛び出して來て、折角の腸詰を渡つて行つてしまひました。その跡で、その日一日どんなに私がひもじい思ひをしたかお察下さい」と悲しい聲を振り絞つて訴へました。

腸詰と聞いて、急に耳を敏でてる猫のミニヨンが、その時

「まあ、あの時の腸詰を拾つたのはあなただつたの。あれは私のよ。實はネ、水車小屋の主婦さんのところから盗み出して來たのよ。——それはさうと、大王さま、ライネツケは、逢ふ度に、なんとか彼とか云つて私達をいぢめて仕方がございません。どうかこの後は二度と再びいぢめないやうにきびしくお申しつけ下さい」

「全くです、あいつは弱い者いぢめをして仕方がありません」かう云つて、豹が言葉を抑みました。「あすこに泣いてゐる兎のランブ君を御覽下さい。あんなに怪我をしてゐます。あれはライネツケが打つやら蹴るやらして怪我をさせたのです。若しその時私が通りかゝらなかつたら、きつと殺されてゐたに違ひありません」

かう云つた調子で、次から次へといろんな動物が立ち上つて、ライネツケの罪を數へ立てるのを聞いてゐた王さまの獅子は、だん／＼額に八の字を寄せて不機嫌になつ





て行きました。

その時、グリーンバートといふ穴熊が、ライネツケの辯護をしようと思つて立ち上りました。グリーンバートは、ライネツケの甥でした。

「ノベル大王に申し上げます。今まで皆さんが仰やつたことは間違つてをります。私の叔父はそんな悪者ではございません。イセグリムこそ不正直な、するい奴でございませぬ。一度などは、叔父と相談をして、漁夫が車に載せて市場へ引いて行く魚を盗んだことがありました。その時、叔父は死んだ振をして道端に仰向けに倒れてゐたのです。すると、漁夫が通りかゝつて、狐の毛皮をこしらへるつもりで、叔父の足を掴んで車の上に抛り上げました。叔父は、漁夫が車を引き出すのを待つて、車の上から、ボン／＼魚を下へ投げてやりました。下には、あのイセグリムが待つてゐて、ガツガツガツ／＼傍から食べて行きました。叔父が魚をみんな振ひ落してしまつてから、下へ飛びおりてイセグリムのところへやつて来て、「俺の分け前をくれ」と云ふと、呆れ返つたことには、一人でみんな食べてしまつて、残つてゐたのは骨ばかりでした。

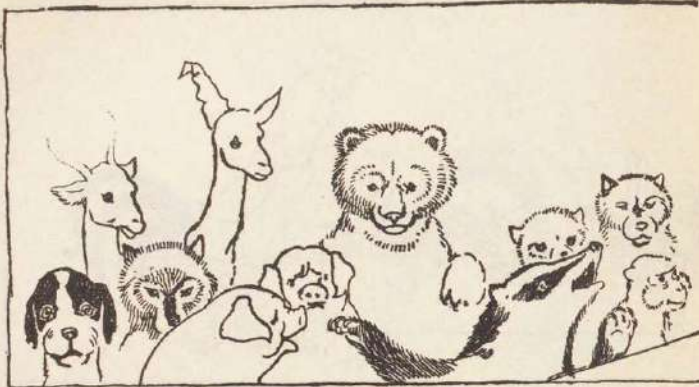
「もう一度こんなこともございました。やつぱり皆く叔父を騙して、夜、或百姓家から子豚を盗ませたのです。叔父は正直ですから、一生懸命になつてやつと豚小屋へ忍び込んで、子豚を窓から下に待つてゐる狼へ渡しました。すると、どうでせう、一人でペロツとみんな食べてしまつて、跡には、その子豚を吊して置いた木の枝が一本残つてゐるばかりだつたと云ふのです。

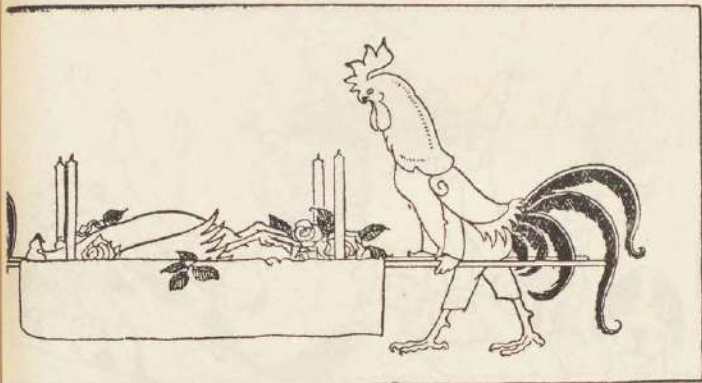
「イセグリムのしたことを、叔父のしたことを比べて見たら、どつちが善くて、どつちが悪いなどは申せまいと存じます。悪いと申せば、両方悪いのですから、よしや叔父をお罰しになるにしても、軽くお罰しになれば澤山かと存じます」
こゝまで喋つて来て、さて一息ついた穴熊のグリーンバートは、みんなが靜かに聞いてゐるのを見て、いかにも得意さうに先を續けました。

「ロス君とミニオンさんとは、叔父がさもなく／＼腸詰を盗んだやうに云はれましたが、もと／＼お二人とも他人のものをお盗みになつたのぢやありませんか。それから、兎のランブ君のことにしても、ランブ君は叔父のお弟子です。一週に三日づつ讃美歌を習ひに来るお弟子です。ところが、ランブ君はおとなしさうに見えても、あれでなかく強情で、おまけに、怒り者なのです。さういふ悪い生徒を懲しめのために打つぐるるのことは、熱心な先生としては止むを得ないことと思ひます」

穴熊のグリーンバートは口達者なのに任せて、ある事ない事とりませて、いかにも尤もらしく喋り散らしました。最後に、やゝ口調を改めて

「さて、皆さん、あなた方は、近頃の叔父の生活ぶりを御存じないでせう。先日、ノベル大王が、「喧嘩をしてはならん、みんな平和に暮らせよ」といふ勅語をお出しになつて以来、すつかり心を改めて、法衣を纏つて坊主のやうな生活をしてゐます。断食をしたり、物を恵んだり、お祈りを上げたりして日を送つてをります。その嫌子を目でも御覽になつたなら、どなただつて、以前叔父が犯した少しばかりの罪はお





許しにならうといふ心持を起すに違ひないと思ひます」

しまひには、こんな出鱈目まで云ひ添へました。

ところへ、あわたましくヘニングといふ雄雞が、二人の若い息子に血だらけの母の死骸を擔がせて駆け込んで來ました。

「大王さまに申し上げます。どうぞライネツケ奴をお罰し下さい。御承知の通り、私も夫婦は、お寺のお庭で、息子十人に娘十四人といふ大家族で平和に暮してをりました。日當りはよし、食べ物も三度々お坊さんの手から戴けるし、全く心配といふものはございませんでした。時々、私も子どもを物陰から狙つてゐるライネツケの姿をチラッと見るのが、心配と云へば心配でした。しかし、それとて、お寺には犬がをりますので、流石のライネツケも近づいては來られませんでした。ところが、先日「喧嘩をしてはならん、みんな平和に暮せよ」といふ勸語が出ました。それに安心をして、お寺の犬は、私達の番をせずに、どこへ遊びに行きました。その留守に、法衣を纏つたライネツケがやつて來て、あゝいふ勸語も出たことだし、私もすつかり心を入れかへてお前さん方を取つて食べようとはしないから、これからは安心をしてどこへでも遊びに出るがいと申しました。私達は大喜びをしました。で、明るる日早速一家みんなで森の中へ遊びに出ました。すると、やにはにライネツケが飛び出して來て、片端から私達の子供を食ひ殺してしまひました。やつと五人だけ生き残つて急いでお寺の方へ歸つて來ると、鐘撞堂の下のところ、血だらけになつた妻の死骸が横はつてゐました。證據にもと思つて、かうして擔いで持つて來た譯でござい

ます」

ヘニングはボロ／＼涙をこぼしながら一部始終を物語りました。これで、穴熊のダリンバートが一生懸命にごまかさうとしたことも嘘であることが現れてしまひました。ノベル王は驚を逆立て、おこりました。まづ雌雞の死骸を手厚く葬つて、その上に石のお墓を立て、おやりになりました。その跡で、改めてみんなと相談をした擧句、兎も角もライネツケをこゝに呼び出さうといふことになりました。

「ブラウン。ライネツケをこゝへ呼び出して來る役目を、その方に命ずる」

ノベル大王は、おも／＼しい口調で、熊にかう命じました。

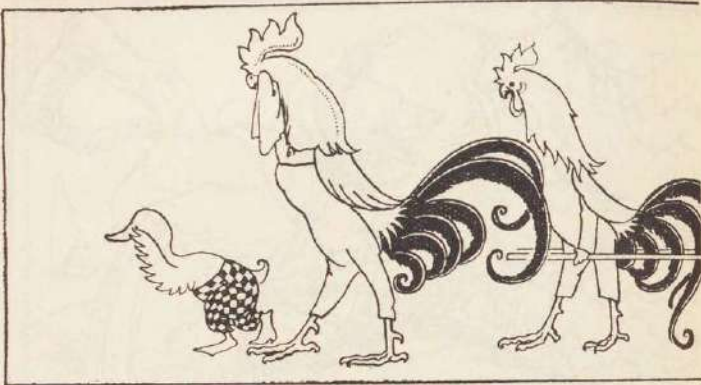
「しかし、ライネツケは悪／＼い奴だから、口車に乗らぬやうに注意いたせ」

かうも云ひ添へました。すると、熊は

「どうか御安心下さい。ライネツケなどに騙される私ではありません」と、得意さうに云つて出て行きました。

ライネツケの住んでゐるノバタキスといふところは、乾いた砂地の荒地を通つて山へかゝつて行くのでした。歩くことのあまり上手でないブラウンは、そこまで行き着いた時には、セ／＼息を切らす程疲れた上に、タク／＼汗を掻いてノボせ返つてゐました。従つて、聲もあら／＼しく

「頼まう、頼まう」と嗷鳴りました。





しかし、中からは返事がありませんでした。ライネツケは、ブラウンの大きな聲を聞いた時、ハハア、こりやア王さまからの使ひだなと、すぐ勸づきました。で、若しかすると、大勢で自分を掴まへに來たのかも知れない、と思つたので、こりやアラうっかり出られないぞと思つて、様子を窺ふためにわざと返事をしずにしたのでした。「ライネツケ、留守か。ゐるなら出て來い、ライネツケ」と、ブラウンは尙も唝鳴り立てました。すると、暫く立つてから、何気ない風をして

「どなた……」と云ひながら、ライネツケが密から首を出しました。さうしてブラウン一人きりだと知ると、

「あ、あなたでしたか」と、急に愛想よく入口を明けて出迎へました。

「お待ちせしてどうも濟みませんでした。なかに、今朝なんにもなかつたので、嫌ひな蜂蜜で食事をしたんですよ。さうしたら氣持が悪くなつてネ、ちよいと一眠りしてゐたもんですから……」

かう云ひながら、ちよいと横目で熊の様子を見ると、好きなく大好きな「蜂蜜」と聞いて、ブラウンは疲れて忘れてしまつたやうに、ニコ／＼笑ひながら、幾度も幾度も唾を飲み込んでゐました。

「もう少し早く來れば、蜂蜜が取つてあつたんですがね……。残念なことをしましたよ」と、ライネツケが云ふと、

「そりやア残念なことをしたな。わし達には、あれ以上の御馳走はないんだからな。

それに近頃はトント見當らないので、暫く食べない」と、舌なめずりをしいしい答へました。

「ちやア少し分けて上げませうか。私はどつきりあるところを知つてゐるんですが……」。しかし、誰にも云つては困りますよ」

かう云つてライネツケに誘はれた時には、ブラウンはもう役目のことも何もすつかり忘れてしまつてゐました。

やがて、二人は揃つて山をおりて行きました。人間の住んでゐる麓近くへ出ると、間もなく、半分ばかり縦に二つに裂けた大きな木が切り倒してあるのが見えました。

ライネツケはその裂けめを指さしながら

「ブラウンさん、これですよ。この中に一ぱい溜まつてゐるんですよ。口を突つ込んでい、だけお咄めなさい」と云ひました。

ブラウンは喉をグビ／＼鳴らしながら

「暫くぶりで好物にありつける」と、嬉しさに夢中になつて、口と一しよに我れ知らず前足を中へ突つ込みました。

それを見ましたライネツケは、裂けめに木挽がさし込んで置いた棧を手早く抜き取つたから溜まりません。バシヤツとブラウンの鼻と前足を挟んだま、裂けめは堅く合はさつてしまひました。その痛さに、思はずブラウンは泣き叫びました。

その聲を聞きつけた村の百姓達が、手に手に鍬や鋤を持つて群け集まつて來たかと





思ふと、大勢で所嫌はずブラウンを設け据ゑました。痛さは痛し、こはさはこはし、夢中になつてブラウンは鼻と前足を引き抜く拍子に、毛と皮とが剥けて赤裸になつてしまひました。それでも體が自由になつたのを幸ひ、傍を流れてゐる河へ太つた體をボチャンと投げ込んで、流れを下つて向う岸へ這ひ上りました。さうして茂みへはひつて、ホツと一息つくつと、痛さに堪へ兼ねて

「ウオー、ウオー」と泣き叫びました。

そこへひよつこりライネツケが姿を見せました。

「ブラウン君、君は大食らひだからいけないよ。一度にタラフク食べようと思ふから、あんな目に逢ふんだよ。しかし、鼻と前足を扶かれた君の恰好ツたらなかつたね、こんな風にあと足で跳いてさ……。ハハハ……」と、暢氣なことを云つて嘲笑ひました。言葉つかひもさつきとは變つてぞんざいになつてゐました。

ライネツケのづう／＼しい様子を見てみると、ブラウンは却つて薄氣味悪くなつて來ました。で、「言も返事もしらずに立ち上るが早いか、眞逆様にまた川へ飛び込みました。さうして泳いでゐるうちに、ふとノベル大王から云ひつかつてゐる役目のことを思ひ出しました。

「さうだ。急いで大王のところへ歸らなければならない。さうしてこの一部始終を話して、ライネツケにひどい罰を被らしてやらう」

さう思つて、一生懸命に流れを泳ぎ下つて行きました。(つゞく)



後の浦島 (少年目 作童話)

東京市立愛日 丸田 吉人 尋常小學校考四 (十一才)

玉手箱をあけておぢいさんになつた浦島はただうなだれて何か考へて居ましたが、ふとうなづいて立上りました。そして風のかはつた町をどぼ／＼歩き出しました。しばらく行くと、一人のしんしんに出會ひました。浦島はさもとくさいさうに、

『もし／＼、これはふたを開けると幸福がでるといふふしぎな箱です。あけてごらんさない。』と首つて玉手箱を見せました。

しんしはよろこんでふたをあけました。すると中から白いけむりが出て、しんしはしらがのおぢいさんになつてしまひました。こんなにして浦島は日本人のうち凡そ半分ばかりを老人にしてしまひました。けいさつでは大へんおこつて、浦島を海へなげこんでしまひました。

それをたくさんの魚が見つけてすぐりゆうぐらへ連れて行きましたが、たたいつも、ここにこして居る乙姫様は今日たげぶん／＼してゐます。そして言ふには、

『あんなにかたく言つておいたのに、あなたふたをあけましたね。やくそくなまもらない人はおいておかれません』と言つて、持つて居た筆を浦島にぶつつけました。そして、

『その筆はあげるから出て行きなさい。』と言つてどん／＼行つてしまひました。魚達も根が乙姫様達の家來達ですから、姫の後についてどん／＼行つてしまひました。浦島はただ一人で泣いて居ました。そこへれいの龜がやつて來て、

『そんなに泣いてもしかたがありません。あ

なたがふたをあけたのが悪いのです。これを上げませう。乙姫様はさういふのでとこれをなげふとよいことが出来るとおつしやいました。』と言つて出したものは、一つの貝で作つたびんでありました。……

ふと目をさますと、それは、はなれ鳥の岩の上でありました。言ふまでもなく今までのことはみんなゆめでありました。けれど、筆とびんは、ちゃんとびんの上のつてゐました。そこで龜の言つたことを信じてゐる浦島は、

『煙が出るよ老人になる。さうならば煙がはひれば若くなるはずだ。それには玉手箱の中の煙はみんな出さなければならぬ。』と言つて、大へん頭ななやまして考へた末、木の葉をもやしてそのけむりをびんの中へ入れました。そしてふたをして出ないやうにしてしまひました。それから乙姫様にいたいた筆で玉手箱の煙をばらひのけてしまひました。浦島はもう、『たけのうちのすくね』よりおぢいさんになりました。それから一度玉手箱にふたをして又あけてびんの中のをけむりを玉手箱の中に入れてしまひました。すると今までのおぢいさんが急に若くなりました。若い昔の浦島太郎になりました。(はたり)



敵討の熊王丸

霜田史光

熊王丸は首尾よく正儀の家來となることが出来ました。しかも小姓といふ正儀にちかに仕へる役目だつたので、もう敵討ちの半は仕遂げたやうな気がしてゐました。そして表面は能達忠義者のやうに見せかけて、敵討なぞと云ふ恐ろしい考へのあることを看破られまゝと思ひました。

それで、熊王丸は人一倍正儀によく仕へました。十分正儀に安心させて、氣を許した時、折を見て殿様から戴いた黄金造りの短刀をもつて刺し殺さうと思つてゐました。

所が、主人の正儀といふ人は話

に聞いてゐたよりは立派な人物でした。心の中は廣くて家來のものにはそれ／＼情をかけ、正しい事と曲つたことはいつでもきつぱりと別けて居られる程心の清い人でした。

人間は誰でも心の内の姿が面にも現はれると申します。熊王丸が正儀に向つて見る時に、正儀の顔は如何にも尊く輝いてゐるやうで、これが憎らしい父の敵だとは一寸思へない位でした。

熊王丸も始めはわざと心を盡して仕へてゐましたが、だんだん仕へてゐる間に、頭一つ下げるのにも、どうやらわざとではないやうに思はれ出したのです。これは正儀の徳が自然と熊王丸に感じられたのでありませう。その上、正儀は大層熊王丸を可愛がりました。多くの小姓の中でも熊王丸には特別に眼を掛けて、何くれとなく世話を焼きました。また、學問なども御自身でお教へになつて、

「武士と云ふものは武ばかりではいかぬ。文の道にも勝れてゐなくては猪武者と云はれるやうになる」と云つては正儀の説いて聞かせる君子孝子の話、さては立派な大將の行ひの話などを聞いてゐますと、熊王丸は、話してゐる正儀自身がそ

の君子であり立派な大將であるやうに思へて、自づと頭が下つてくるのでした。

かうして毎日、御殿から引下つて自分の部屋に入ると、熊王丸は故里を出る時殿様から戴いた黄金造りの短刀を出して口惜しさや、無念さの爲めに、心は焼たゞれるやうになるのでした。

「私の桶への恨みもこの刀に籠つてゐると思つて呉れよ。」と云つたあの時の殿様の顔がまぎ／＼と眼に浮んで來るのでした。するとすぐ様父の住吉の城むにゆく朝の、別れ際の言葉も思ひ出されるのでした。

「きつと父の敵を討つて呉れよ。」と亡き父の聲がまるで耳元であるかのやうに思はれました。熊王丸はさうした心にきつと決心をして、

「自分は何んと云ふ意氣地なした。どうして敵の正儀を刺すことが出来ないのだ。よし、明日こそはきつとこの短刀であるの怖らしい正儀を突に刺してやらう。」と思ひました。

その翌日熊王丸は黄金造りの小刀を懷中に隠して、今日こそは正儀の胸をたゞ一突きにして呉れようと思つて御殿に出

かけるのですが、さて正儀の清らかな顔を見たり、その情の籠つた言葉を聞いたりしてると、懐中へ手を入れて短刀の柄を握つても、どうしても、それを抜くことが出来ないのでした。

さうして歸つて来て自分の部屋に獨りであると、討てない無念がひし／＼と胸をついてくるのでした。するとまた父の別れの言葉や、殿様の言葉などが、まるで夢の魔のやうに憶ひ出され、現はれて来て、熊王丸を悩ませるのでした。

かうして三年は夢のやうに過ぎました。熊王丸が十五になつた或日のこと、殿様は小姓に命令けて、熊王丸にすぐ様御殿に來るやうにとの知らせでした。

心に恨みを持つ熊王丸は殿様が特別にお招びになるのは、どうした用事であらうと、心の中で心配しながら御殿に出て見ますと、殿様は如何にも晴々しいお顔色に、にこやかな微笑を浮べて、

「熊王丸、今日はお前を喜ばせようと思つて招んだのだ。お前も自分の館へ来てはや三年になる。武藝も學問も最早一通りは辨へるやうになつた。それで私はお前に河内の國のなか

で、若干の領地を與へて一廉の武士にしてやりたいと思ふ。」と仰せられました。

熊王丸は今迄の正儀の恩や情でさへ、敵を討たうとする心を鈍らせてゐるのでから、此上恩に與かつては益々心がくじけて、向討つことが出来なくなるだらうと思つたので、

「有難い仰せは涙の出るほどでございますが、まだ私はお勤め申してから僅か三年しか経ちませぬ。その上一矢の手柄さへ立てない身でございますから、その事は後のことにして下さいませう。」

と云つて辭退をいたしました。

正儀はそれを聞いて熊王丸の心の清いことを思ひ、益々可愛がる心になりました。

熊王丸は殿様の恩と情とが益々自分の身に加つて來ますので、今の内に討たなければもう後々まで討つことは出来ないと思ひました。

やがてその年も秋になつて、木の葉が淋しく庭の上になる頃となると、氣候は追ひ立てられるやうに寒い冬へと急いで、氣がついて見れば今日は亡き父の三回忌でありました。

止むなく云はれるまゝに式臺に坐れば役目の人が起つて熊王丸の髻を上げました。

すると和泉守は、早速美しい烏帽子をとつて熊王丸に冠せました。

「お、洵に天晴れな武者姿ぢや。熊王丸、お前は嬉しからう。私も嬉しく思ふぞ。今日からお前は和田小次郎正寛と名告るがよい。」

と云つて殿様は扇子を開いて熊王丸の姿を譽め祝ひました。そして一領の鎧を出して、

「この鎧は朝廷から正儀が頂戴したものであるが、お祝ひの徴しにお前に上げる。さア着て見るがよい。」と云つて家來の者に命令けて着せさせました。

鎧を着た熊王丸の姿は十五とは思へぬ程立派なものでしたので、和田和泉守や、兵庫介やその他見てゐた人々は大層譽めました。

然し、熊王丸の心の裡は熱いお湯の煮立つやうな思ひでした。この恩や情が自分の敵討ちの心を鈍らすのかと思つて、熊王丸は感極つてはら／＼と涙を流しました。

「今日は父の命日、今日討たなければもう一生討つことは出来ない。今日こそは思ひ切つて父の敵、殿様の仇である正儀を刺し殺さう。」

と、熊王丸はいよ／＼固い決心をして御殿に出掛けました。勿論その懐中には例の短刀が忍ばせてありました。

「もうどんなことがあつても正儀の恩や情を思ふまい。自分には是非とも敵を討たなければならぬのだから。」と、思ひました。

御殿に出ると正儀は熊王丸の顔を見るなり云ひ掛けました

「熊王丸、いまお前を招び、やらうと思つてゐた所だ。今日は日もよいからお前は元服するがよい、そして今日から一人前の武士となるのだ。幸ひそれによるる利泉守和田正武が烏帽子親になつて呉れるさうだから、早速支度をすることがよい。」と云つて、もうその用意も出来てゐるのでした。

熊王丸は今日こそ、どんなことがあつても受けまいと決心しましたのですが、その情ある正儀の言葉には、何んとなく力が籠つてゐて、どうしても、断り切れなかつたのであります。

兵衛介は熊王丸の涙を見替めて
「熊王殿、あなたは身に餘りほこの有難さを受けながら、何
んでそのやうに涙を流すのですか。」
と、訊ねました。

熊王丸は涙を見替め
られて、



い正儀の顔は、今日は殊更輝いてるやうに、尊く見えまし
た。
熊王丸はどうしても短刀を悪人正儀の胸に突き刺すことが
出来ませんでした。

熊王丸は持つてゐた黄金造りの短刀を其
場に投げ出して、正儀の前へひれ伏しまし
た。

そして胸の奥底からこみ上げて来る涙に
言葉も跡切れながら申しました。

「正儀様、今は何をお隠し申しませう。私
は、父の敵のあなたを討たうと思つて初め
から備つてあなたの家來になつた者です。
然し、私にはあなたの恩と情とが身に染み
て、どうしても討つことが出来ませんでし
た。あゝ、正儀様、私を赦して下さいまし。」

熊王丸はやつとのことかう云つたかと思
ふと、一度投げ出した短刀を拾ひとつて、
矢筈に自分の腹に突き立てようといひまし

そして、唯一突と腹
ひを定めた時に、いつ
もながら情涙ぐやさし
進みました。



した。

それを見た正儀はしつかと熊王丸の手を抑へ、

「熊王丸、早まつてはならぬ。お前にそんな望みがあるうと
は私は今日まで知らなかつた。それを聞いて私は少しもお前

を憎む気にはなれない。却つてお前の心に
感ずるばかりだ、どうか死ぬことはかりは
思ひ止まるがよい。」

熊王丸はかう云はれて、
「それでは私は今日から姿を變へて僧にな
ります。」

と云つて、その場で髪を剃り落し、僧の姿
になりました。

それを見た人々は誰しも熊王丸の心の裡
を思ひやつて涙を流さないものはありませ
んでした。

その夜、熊王丸はよく研えた月の光を浴
びて往生院と云ふお寺にゆきました。

明るく澄み切つた月を仰いで、熊王丸は
どんなに嘆いたことぞうか。

「一步毎に踏んでゆく道の上の落葉も、熊
王丸のために泣いてゐるやうな悲しい響を
立てました。
(をばり)

山で拾った胡桃の實

若山牧水

山で拾った胡桃の實

誰にやろとて拾はうか

みんなお前に遣ろばかり

さアさおやめよ泣いじやくり

さアさおやめよ泣いじやくり

山の胡桃が笑はうに



山で拾った胡桃の實
誰にやろとて拾はうか





瘤 (入選)

北田初子

皆さんは、「瘤とり」のおはしをお讀に
なりましたでせう。これもあの、お話に
似てゐますけれど、すこしあれよりも面
白のお話ですから讀んで見て下さい。
むかし、あるところに、二人の若者があ
りました。
一人の方は大の癩癩行で、一人のお母様は大
切にしてをりました。

この次郎作にもやつぱり瘤が目の上にあり
ましたので、それを大癩心配していろ／＼手
當をいたしましたが、どうすることも出来ま
せんでした。一寸でも切らうとすれば、たま
らなく痛くて、どうしても切ることが出来ま
せん。
それで毎日、家の中で召使を遣ひまはして、
自分の仕いた放題に暮してをりました。兩親も

「いゝえ、お母様、そんな事をおつしやいま
せんで、何かほしいものがおありなら、遠慮
なくおつしやつて下さいませ。」
「そんなにお前がいつてくれるなら、私はた
つた一つ、ほしいものがあるんだが、私は桃
の實がたべたいよ。一つでいゝから……でも
今はとても手には入らないから、どうか心配

しないでおくれ。」
息子はそれをきくと、大へん困りました。
どうかしてお母様に桃がたべさせたいし、と
いつて十二月になつては桃の實のある筈もな
く、どうしやうかと思ひました。でもお母様
のやつれた顔を見ると、どうしても望まかな
へて上げなければならぬと決心しました。
それでお母様に、
「いゝえ、御心配には及びません。きつと私
が探し出して来て差し上げます。すこしの間お
待ち下さいませ。」といつて、家を出かけまし
た。そしていつも木をとりに行く山へ出かけ
ました。

うかと思つて、本當に泣きたい位困つてしま
ひました。
ところが、遠くの方に小山のやうなこんも
りとした雪山が見えましたから、何の氣なし
に行つて見ますと、下の方に鬮道のやうなも
のがありますので、そこを入つて行つてみま
した。
中へ入ると、そこは山ではなくて丁度雪が
まばりなとりまいてゐて、酒鉢のやうになつ
てゐるのでした。そして不思議にもその眞
中は雪がなく、腰掛が十程ならんでありま
した。孝行息子は、恐々中へ入つてその腰掛
なながめてをりました。

お母様に食べさせたい、たべさせたいと思
つてゐた桃が、目の前へころがつて来たので
息子はもう恐いのも忘れて、チョコツとひろつ
つたら、盆になくなつたので大驚おどろきま
した。
「これはどうしたといふ事だ。今こゝへ落し
たばかりの桃がなくなつてしまつたぞ。」
「なに、そんな事はなからう。」
「いやたしかた。」
「ではさがせ。」
鬼はみんな立上つて、腰掛の下の方を探し

孝行息子は霧を町へ賣りに行くのを、商賣
にしてをりました。それでだん／＼と山へ登
つて行きますと急に雪がふり出して、見てあ
る間にあかりが、前白になつてしまひました
それでもどうかして、一つでもいゝから桃を
さがしたいと思つて、息子はだん／＼と山深
く入つて行きました。その内、あまり雪がふ
かいので道に迷つてしまつて、どうしても元
の方へ歸れなくなりしました。息子はどうし

かこちらへ来るやうな音がしばじめました。
息子は大聲驚いて逃げようと思ひましたが、
入口が一つしかないのどうすることも出来
ません。仕方がありませんから、腰掛の下へ
這込みました。そしてそつと覗いてみてあ
すと、やがて入口の方から、赤鬼や、青鬼が
何か大變うれしい事でもあると見えて、あの
恐い顔なニコ／＼させて入つて来ました。そ

一人息子ですから、我儘一パイにさせてをり
ました。
さて孝行息子のお母様は、陽氣が寒くなつ
てくるに隨つてだん／＼體がわるくなつて、
暮の月の三日の事でしたが、もうすつかりお
衰へて、とても、むづかしいやうになりまし
た。
息子は心配でたまりません。お母様の枕も
とでいろ／＼優しく、慰めてをりました。
「お母様、何か召つたいたいものがございま
すか。なんなりとおつしやつて下さいませ。」
「いゝえ、私はお前の孝行が何よりもうれし
いのです。それより外に、ほしいものはあり
ません。」
「いゝえ、お母様、そんな事をおつしやいま
せんで、何かほしいものがおありなら、遠慮
なくおつしやつて下さいませ。」
「そんなにお前がいつてくれるなら、私はた
つた一つ、ほしいものがあるんだが、私は桃
の實がたべたいよ。一つでいゝから……でも
今はとても手には入らないから、どうか心配

はじめました。そしてとうとう赤鬼の懸掛の下に小さくなってゐた息子を見つけた。『やア、こゝに入間がかくれてゐる。コラ！貴様だナ、おれの桃をとつたのは。』



『ハイ、左様でございます。つい母親にたべさせたいばかりに、わるいとは存じましたが一ついたゞいてしまひました。どうぞ、この桃を母親にたべさせてやつて下さいまし。そのあとでなら、私はどんなになされてもよろしうございます。』

存じません。どうぞおゆるして下さい。『なんでもいゝから踊れ、踊らないとゆるさんぞ。』

息子は涙ながしていろ／＼とたのみました。だまつてきてゐた鬼共は、急に感心したやうに申しました。『ウム、成程、貴様はなかく親行なやつだナ。よし／＼ゆるしてやるとも。そしてこの桃もみんなくれてやる。だが今日は折角のしい祝なんだから一つなんでもいゝから踊りを踊ってくれ。』

『私は何んにも踊りません。』

『なんでもいゝから踊りなさい。こんな踊りでお氣に召すなら、舞つて踊りませう。』



『さうか、よく承知。』

そこで息子は、又来る時のために鬼によく道ををそはりながら山を下りました。

『あゝこれで我々は別れよう。きつと來年の正月の十五日に來いよ。さう／＼お前のその瘡が面白いのだから、今度くる證據にそれを置いて行け』といつて、いきなり瘡をむしりつけてしまひました。息子はハッ！と思つてあとをなでてみましたら、あとも何んにもなく綺麗になつておりました。息子がよろこんでゐる内に、鬼は澤山の桃をそこに置いて、皆

て中も見えませんでした。息子は家の中へいそいで入つて行きまして、

『お母様、お母様』と呼びました。

しかし聲がしないので、おどろいて燈をつけてみますと、あんまり息子の聲がおそかつたので、心配のあまり、お母様はもう聲も出なかつたのです。息子は、

『なんでもいゝから踊りなさい。こんな踊りでお氣に召すなら、舞つて踊りませう。』



お城の秘密

速水頼之介

西のすつと果ての國のある島に、海の中に半島のやうになつて突き出てる、大きい立派なお城のあるのを御存じの方もありません。その古いお城に起つた不思議な面白いお話をいたしま

このお城は随分古い昔に造られたものらしく、それにお城の今の持主が一向かまひつけないためでもありませんが、庭も館物もひどく荒れ果て、もう永い年月の間誰一人足をふみ入れたものがないと村人は云つてゐます。が、お城は廣壯なもので、方々に建てられた塔のやうな櫓は、沖を通る船からも見えて、なほ立派なものです。

昔、このお城の中でたいへん盛んなお婚禮があげられました。それはこのお城の殿様のたつた一人の可愛いお姫様のお嫁入りでした。

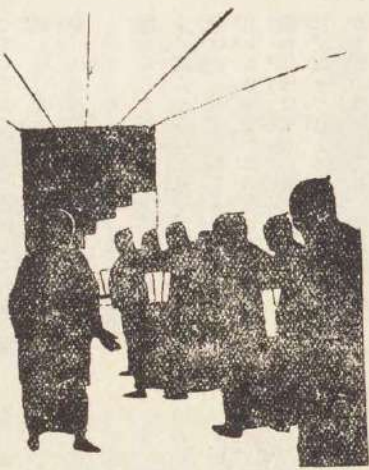
お城の真中の大廣間にはそれはく澤山のお客様が請待されて、今はもうお酒宴の真最中でありました。舞が始まる、鳴物が入る、歌も食べる飲む、といふ風に騒ぎはいよいよ盛んになりました。お客様はこんな目出度い、こんな盛んなお婚禮に驚かれたので、す

つかり満足して、嬉しいのと愉快なので、肝腎のお姫様のことなどは全く忘れてしまひました。さうしてだん／＼夜が更けて行きました。お酒宴はますます盛んになるばかりで、いつ果てやうともわかりませんでした。

が、お姫様がふと気がついて見るとお姫様の姿が見えませんが、お姫様は心配して方々を見廻しましたが見當りません。そこでお姫様のお母様にそのことを話しました。お母様は驚いて、自分、お姫様は自分の居間に居るだらうと思ひながら、すぐにお姫様を捜しに客間を出て行きました。ところが案外にもお姫様はそこにはありませんでした。お母様は不審がつて召使達に尋ねました。すると召使の一人が、
「お姫様はあの廊下を向ふへ歩いて行かれました。私が遠くからお見かけたのですが真白いお召着だったのでお姫様に違ひありません。それからすつ

と私はこゝらに居ましたが、それきりお姫様はそこからお歸りになりませんでした。」と申しました。

ました。殊にお姫様が口頃行きさうなところは捜されたのです。それはお城の西の角にある櫓の中の部屋でした。そこから見る海の眺めが一番よかつたのと、その部屋の壁には先祖代々、手を觸れることのならぬ掟になつてゐる一枚の美しい女のお姫様が特別に氣に入つてゐるからです。お姫様のお父様やお母様は、何故ともわからぬ給に就ての掟や何となく薄暗くて無氣味なその部屋の様子が嫌ひで、殆どこの部屋にはよりつきませんでした。



そしてどこもかしこも残る限なく捜しました。多勢のお客様達も、すつかりしをれきつてゐるお姫様を先登に立てて、心配さうにいつて来ました。何遍となくお城の中が残らず捜され

澤山の人達はその中へも雪崩れ込みました。そして極く念入りに部屋中を調べましたが、やつぱり無駄でした。検べると云つてもその部屋の中にはさつきの女の繪と、その前の方に床から

一段高くなつた三尺四方ぐりの座があるばかりでした。その他にはかくれようとしてもかくれるものがありませんでした。
人々は不満足ながらその部屋を引きあげました。が捜すことはやめられませんでした。お客様の中のある人達は氣の毒がつてそれから毎日々々、永い間捜しつづけました。廣いお城の中をぐる／＼と捜し続けましたが、結局、やはり失敗してしまひました。そしてたうとうこの不幸なお姫様は消えてなくなつてしまつたのです。

この哀れなお話の續きが始まるまでに百年ばかりたちました。
このお城の極く近所に住んでゐるある百姓に、一人の男の子と二人の女の子とがありました。この子供達のところへ、毎日の様に遊び友達がやつて来ました。そしてこのお城の淋しい廊下

で勝手放題に遊ぶのが例になつてゐました。この百姓の息子は洋一と云つてその頃十二歳で、活潑な氣儘者でありました。思ひきつてひどい亂暴の好きな息子で澤山の悪戯小僧達と一緒にやつてやるのでした。それでも矢張り双親にはひどく可愛がられてゐました。息子はお城の廊下で隠れん坊をするところが何より好きでした。それは自分が隠れることが特別に上手だつたからです。ほんたうに、息子が隠れると他の者は誰も、どうしても見つけることが出来ませんでした。そしてこの息子の隠れ場所は皆なに祕密になつてゐました。たゞ、息子の家の大きい黒い猫ばかりがお伴をして知つてゐました。

ある日曜日の午後、子供達はまた、隠れん坊をして遊びました。洋一は以前のやうに、やつぱり見つけられませんでした。その内に一勝負すんだのでいつもの通りに皆んなが

「洋一さん！ もう濟んでよ！」と大聲に叫びました。すると、いつもどこからか飛び出してくる洋一が、今日に



限つて返事もしないのです。そこで、も一度、皆んなが口々に呼びました。それでも洋一からは返事もなく、勿論聲も見せません。當の者は心細くなつ

お城の中のあちらこちらで洋一の名を呼びました。それでも何の返事もありませんでした。村の人達も双親の悲しみに同情して總出で捜しましたが、洋一の姿は遂に見つかりませんでした。

三

翌日もまた終日お城の中を、部屋といふ部屋を、天井から窓まで残らず捜しましたが、洋一の姿はどこにも見つかりませんでした。人々は疲れきつて哀れな百姓の家に引きあけました。そこで、村の一番老とつた永願寺の鐘撞きお爺さんが、あの恐ろしいお婚禮の夜の物語を始めました。

そこへ、入口の戸の隙間から大きい黒い猫が忍び込みました。それは、その日、一日姿を見せなかつたこの家の猫でした。洋一のお母さんは、それを見るなり、一聲、するどい叫び聲をあけて猫に飛びつきました。その筈です。その猫は洋一の帽子を口にくはえて

て心配し出しました。その中にだんだん時間がたつて行きました。そこへ洋一のお父さんとお母さんが、あまり洋一の歸りが遅いので迎へに来ました。お母さんは、洋一の居ないのをすぐに見つけて、

「洋一は何處へ行きましたか？」と尋ねました。すると十二人の子供は一齊に口を揃へて、

「あの長い廊下を向の方へ行きました。」と指さして教へました。

「あさうか、私も、お前達の捜すのを手傳つてあげよう。きつとをちさんが捜し出して見せる。」とお父さんは云つて「廊下を向ふの方へ行つて、それからどつちに行つたか知つてゐるかネ」と訊ねました。

「あの西の櫓の方へ——」と、子供達が答へました。

「あんまり悪戯だからこんなことなる。いつも隠れん坊で自分が一番上手

ました。この猫は元來家の人達を恐れてゐました。が母親に對しては特別に押れてゐました。で、今も自分の方から母親の膝の上に抱かれるようにして、哀れな母親が撫でたり、頬すりしたりするのを喜んでゐるやうでした。ところが、母親の熱い涙が猫の背にこぼれ落ちた時、猫はすぐに、利巧さうに母親の膝からとび去りました。

洋一がどこかにゐることは確かになりました。さうしてその場所は洋一には逃げ道がなく、猫はその道から匍ひ出すことが出来るらしいことがわかりました。でこの小徑は洋一のゐるところをさがすためには是非みつけ出さなければなりません。

母親は帽子を猫の口からとつて、特別に御馳走の餌をやりました。それから猫の首に、お握りを包んだ手拭を巻きつけました。父親は猫について行く準備をしました。他の人が入口の戸を

だと威張つてゐたから、どこに隠れるんだと訊いても云はなかつたが、ひよつとすると大變なことになつたかも知



れないぞ。私はあの西の櫓が一番嫌ひなんだ。」とお父さんはぶつ／＼云ひながら捜しにかゝりました。そして日の暮れるまで捜しました。

あけました。するとこの備い猫は、今何事が起つてゐるかと思ふことをちやんと知つてゐるとでもいふ風に、自分についてくる人達が歩みよいやうにゆつくり歩き出しました。猫はお城の外を廻つて西の海岸の方に下りて行きました。そして獨りだに開いてゐる門をくづつて右に折れ、大きい櫓の一つたつてゐる岩の上のほりつきました。その岩には横の方に割れ目がありました。そのわれ目も、やつと子供の小さいからだが通れる位でありました。猫はそのわれ目の中に消えました。父親は飛ぶやうにしてその割れ目のところに走つて来て、洋一の名を呼びました。返事がありませんでした。皆の者は、新しい心配に襲はれました。もしかすると死んでゐないだらうかと云ふ心配が皆の心をとらへました。そこへ、またひよつくり猫が歸つて来ました。前のお擧りを無くして、その代りに口

にはまた片足の足袋をくはへてゐました。皆はそれを見るなり嬉しさのあまり、ワツと大聲をあげました。皆の者はすぐにこの小さな割れ目を大きくする工事にとりかゝりました。たうとうその翌日その仕事が出来上りました。ところが穴の中はすぐに、網で下りなければならぬほど急な崖になつてゐました。

四

父親は穴の中に一足入れるとすぐに精一杯の聲を張りあげて洋一の名を呼びました。すると、かすかな聲で返事がきこえて来ました。その時父親の喜びはまあどんなでしたらう！父親は網にすがるとする／＼と下へ降りて行きました。すると一つの簀に達しました。そこに洋一が居ました。父親は洋一を抱きあげました。洋一は大聲をあげて泣きながらお父さんに倒れかゝるやうに抱きつきました。

それから洋一を抱いて城の外に出るのが、また骨でしたが、嬉しさで夢中になつてゐる父親には何でもありませんでした。家に歸ると洋一はちぎりに寝かしつけられました。その日の中に熱病が起りました。その熱に浮かされて、恐ろしかつた事に就て囁言を云ひました。どうして深い深い簀に落ちたか、どんなに永らく氣を失つてゐたか、それからやつと正氣に復つたとき今自分がどこにゐるのかと、どんなにあちらこちらを手探りに捜し廻つたかそして洋一は何も見出すことが出来ずに、只自分の側の石の上に、美しい女が坐つてゐたこと、その女は網の白い着物をつけてゐたが、顔は骸骨であつたことなどを喋りました。

その囁言はみんなほんたうでした。まもなく洋一は恢復しました。元氣も出て来ました。そこで洋一は父親や村の人達を慰撫して御の配の櫓の御の配

な部屋の前に行きました。その入口の戸には牡丹に唐獅子の繪が描いてあつて、方々に金物の鉢が打つてありました。洋一がこの鉢の上から三番の列の右から七つ目の一つを押すと、その戸がする／＼と上へ上がりました。皆の者は氣味悪さうに塵の澤山蓄つてゐる部屋の中に入つて行きました。此部屋が洋一の隠れ場所でありました。それを洋一がある時、ひよつとした拍子に見つけたのでした。それから始終そこに隠れて、遊び友達を困らせてゐたのでした。

洋一はこの部屋に入ると、おつ／＼しながら入口のところから進まないで、指で向ふの壁の女の繪姿を指しました。繪は随分古びて、縁の方々は蟲に食はれてほろ／＼になつてゐました。が、中々立派なものでした。

「これがどうしたの？」と、父親が無氣味さうに繪を指さしながら洋一に訊

ねました。洋一は暫くの間たちどまつたまゝ、恐ろしさを思ひかへして物も云へませんでした。そして、皆の人々をその繪の方へ



近つかせない様に幾度も手を振りました。それからやつと話し出しました。「私は度々この部屋にかくれたんです。そしていつもこの戸の傍に立つてゐたんです。それがこの前の時に、何んだかあの繪の方に近づいて見たくな

つたので、繪の正面のあの座のやうな臺の上へ上りました。するとそうら、あそこに光つた圓いものがありませう。あの光つたものが足もとにあるのに氣がつかしました。何であらうかと思つて、それを足先で弄つた拍子に、足許がぐら／＼としてそれきり私は暫らくの間何んにも知りませんでした。百年前の結婚式の夜、あの可哀相な嫁様は洋一と同じ目に遭つたのでした。ものずきにあの光るものを蹴つたのか、或は知らず蹴らずに足がそれに満つたのかはわかりませんが。皆の者は洋一の話しに従つて光つたものを棒切れの先で押すと、その塵がぐら／＼と傾いて下に落ちましたがまた撥ね反す様にして戻つて来ました。皆の者は座を巧く下に卸して、蠟燭に火をともし網で簀に下りて行きました。するとそこに、あの不幸な花嫁の遺したものを見出しました。(なはり)

つりがね草(雑草)

和歌山縣串本枝尋五

矢倉チツ

うす紫の

つりがね草

風にゆれても

音しない

石垣

石垣の穴は たくさん

かにの家

くらくてさみしい

かにの町



石垣

柿の葉

今朝柿の葉が

ちりました

さよならといつて

ちりました

ゆめ

ゆふべ見た

わたしのゆめも

あなたのゆめも

おひるになつたら

どこへ行くのでせう、



ゆめ

香爐の行方

森川一朗



二、雲水は何者に殺されたか

俳諧師雲水の子草太郎は、父が尊い香爐を賣るために江戸に向つたのを、親戚の人達と共に村邊まで送り出して、その歸りは日頃親しい従弟の次郎作と伯父の六兵衛との三人連で我家に戻つて來ました。道々伯父は、

「草太郎、お前もこれで安心したらう。一生奉公に取られるなんて不幸から逃れたんだから、こんな嬉しいことはないだらう。伯父さんも本當に安心したよ。俺もな、毎日お前の家のことばかり心配になつて仕方がなかつたのだよ。」

「え、私も嬉しくなりました。それにしてもあの香爐がうまく五百兩に賣れればいけれど。」と草太郎はや、心配顔でした。

「そりやお前、あの岡石さんとやらが云つたことによつて、問題ひはなからうよ。慌しるる所へ、慌し氣に走つて來た者がありません。見るとそれは江戸通ひの飛脚を薬としてゐる三太といふ男でした。」

「草太郎さん、大、大變です。」

「えッ、草太郎は電光のやうに父のことが思やられて思はず、跣足で庭に飛び降りました。」

「草太郎さん、あんたさんのお父さんが……」と云つて三太は息切れと感情の激動の爲めに聲がつかまりました。

「えッ、私の父がどうかしたのでですか。」

草太郎は驚き顔へる聲で三太の肩を小づくやうにして性急に訊ねました。

「あの……松林の中で……、殺されてゐました。」

その言葉を聞くと同時に草太郎は、「あッ」と云つて顔青になつてしまひました。手足はふるふる顫へて、一寸の間聲も出ませんでした。

やがて口事ならむ様子に、駆けつけた近所の人達、殊に當々雲水の邊に感じて居つた人々はそれは一大事だとばかりに、大勢どやどやその場所へ駆け出しました。勿論、三太を先

あの人は晴大名の立派な香爐を見て知つてゐるのださうだから。」

「さうでせうか」と云つて草太郎は「あ、神様、お父さんが無事に歸つて來て下さるやうに」と心の中で神様を念じました。それと云ふのも草太郎にとつては、僅かの間の別れでありながら、何んとなく父の身が案ぜられてならなかつたのでした。村邊で別れた時の父の微笑にも、何處やら寂しい影があつたやうな、又人々に別れてとほくと街道をゆく父の後姿が、松並木の間にチラ／＼と見え隠れた時、草太郎は何物とも知れぬ悲しい心持に誘はれて、思はずはろりと涙を落しさうになつた位でした。

「草ちゃん、今夜一人で留守してゐるのは寂しいだらう。己れが泊らうか。」

従弟の次郎作の云ふ言葉に、草太郎ははつとしたやうに、そして喜ばし氣に、

「あ、本當に泊つてお呉れよ、寂しいから。」

それを聞いてゐた伯父は従弟に向つて、

「次郎作お前何を云ふんだ。お前は今夜母さんに云ひ付けられた、感情の世帯があるぢやないに立て、草太郎少年は狂つたやうになつて飛び出したのであります。けれども父の殺されたと云ふ處までは申々の遺體がありません。それでも皆は飛ぶやうに急いで、五里ばかり離れた松林に着きました。見ると其處は人家の無えた松林の中の一本道で、とある松の根方に父は無慘にも切り殺されてゐるのでした。草太郎を始め、雲水を敬つてゐる人達の嘆きは云ひ様もない程でした。草太郎が血に染つた父の死體に取り纏つて、嘆き泣く聲を聞いては誰一人涙を流さない者もありませんでした。」

折から平生のやうに松の小枝に飛び歩きながらしきりに啼いてゐる類白の聲も、何んとなく雲水の死を嘆き悲しんでゐるやうに見えました。この小鳥はきつと、人々の來る處、かうして啼いて啼きながら、雲水の身近く松の枝で見守つてゐたのでせう。

それにしても情いのは殺した奴だと、やがて人々は下手人を憎む心で燃え出しました。雲水の傷は滅多先頭に切りつけられた刀傷で、それから考へても相手は腕の海太たものでか

か。

「だつてお父さん、草ちゃんか……」

「馬鹿ッ、お前は歸るんだと云ふのに。」

草太郎はそれを聞いて云ひました。

「い、え、伯父さん、私は一寸も寂しがりません。一人だつていいのですよ。」

「い、お前ぼしつかり者だからな。」

と伯父は賞めるとも皮肉るともつかないやうな言葉を云つたので、草太郎も妙に暗い氣持になつてしまひ、そのまゝ三人は黙つて道を歩いて、草太郎の家に入りました。然し伯父は上りもせず、

「草太郎、ぢの俺は歸るからな、よく氣をつけて留守居をするんだぞ。次郎作、さア行かう」と従弟を促して行つてしまひました。

草太郎は妙に心能が湧いたけれども心でそれを打ち消して、甲斐々々しく家の掃除をした後で、父に教へられてゐる「大塚」といふ本を渡つてゐるのでした。

やがて、その日も暮れて、草太郎は瀧り寂しい夜を明し、朝日が月の隙間から差し込んで來たのに驚いて戸を繰り開けようとしてゐ

いことは分りました。

ふと、草太郎は気が付いて見ると、父が風呂敷包に背負つて出掛けた大切な香爐がありません。

「香爐がない……うむまては香爐欲しさに父を殺したんだな。」

草太郎は齒ぎりをして、口惜がりました。

「強盗の仕業でせうか。」

「それとも誰か遺恨があつたのでせうか。」

「いや、あの雲水さんに遺恨を持つやうな人のあらう筈がない。」

「ちや雲水さんは途中で連が出來て、その大切な香爐とやらを見せたんだらう。そしてその連が急に欲しくなつて殺してしまつたんだらう。」

「いや、雲水さんはそんな粗忽な人ぢやない。」

などと人々はとりとりに噂し合ひましたが誰しもその下手人がどのやうな種類の人であるかさへ判然と見當のつくものはないのでした。兎も何れも何か證據になるやうなもの落ちてゐぬかとその邊を探しました。一人が

「こんなものがありました」と拾ひ上げたものは矢立でありました。蓋を開いて見ると一本の筆があり墨壺もまた新しい墨の匂ひに満ちてゐました。

草太郎はそれも何かの手掛りになるだらうと思つて手拭に包んで懐中に押し入れました。そして尙もその邊を隈なく探しましたが、外には何一つ残された品はありませんでした。

草太郎は人達の手傳つて賣つて泣く／＼父の死骸を擔つて家路につきました。村の入口まで來ると、大勢の村人を始め親戚の人達が悲しんで出迎へました。やがて家に入り座敷に寝かして水で顔などの血塗れを洗つてやつて居りますと、雲水の恩を受けた村人達は後から後からと悔みを述べて來て、線香を始め米、餅、味噌、醤油、又はお金を包んで澤山に賣ひ物が集りました。草太郎は直ちに線香を枕元によつて人を頼んで和尙さん來て貰ふことにしました。

その時後れ走せに飛んで來た伯父の六兵衛は雲水の死に縁つて、

「兄さん、まあ、あなたは何んといふ情ない

のは腰に差してゐるやうに見受けましたが、あの晩は家の碓と筆とを使ひましたので、石さんは矢立は出してませんでした。それ故私にはあの人の矢立は見ずじまつました。」

「さうか、何にしても俺は彼奴のやうに思はれる否、必ず彼奴に相違ない。一度自分が見出した尊い香爐を奪はう爲めにわざ／＼、自分が紹介状などを書いて江戸へやつたのだ。そして松林に待受けてゐて殺して奪つたに相違ない。どうです皆さんさう思ひませんか。」

並居る人達は伯父の六兵衛の言葉を聞いて皆一様に、

「その男に相違あるまい」と申すのでした。伯父は更に草太郎に向つて、

「どうだ、草太郎、お前はさう思はないか。」

と訊ねました。草太郎は始めのうちは一昨夜泊つた人の好きなやうな俳諧師がそんな大それた

姿になつたのです。」と云つて暫くは涙に濡れてゐる様子でした。

所へ、誰か肩付たと見えて役人が四五名やつて來ました。そして死體を検査めり様子

を聞いたりして去りました。

其夜は草太郎を始め伯父、従弟、その他の親戚の人達が涙の通夜をいたしました。線香の薫のする部屋、亡人の遺骸の前で、人々

はどんなに無念の物語をしたでせう。殊に少年ながら草太郎は骨身に沁みわたる程、無念に思ひ、草を分けても負評をしなければならぬと決心をしたのでした。

「それにしても犯人は一體何人だらう。」と云ふ疑ひは人々の間に起りました。この時伯父の六兵衛は、例の矢立をしきりに眺めてゐた

が、ばたと膝を打つて、

「うむ、思ひ當つた、どうもさうらしい。それ、一昨夜泊つた云ふ旅の俳諧師の幽石とやらな、彼奴がどうも怪しい。」

人々の眼は異様に輝いて伯父の顔に集まりました。

「私さう思ひます。」と答へました。そして次に、あの表面人の好きなやうな顔をしてゐた幽石が、燃えるやうな情みで思ひ出されて來ました。

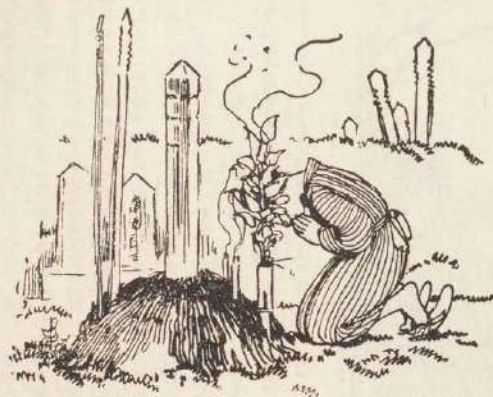
その翌日村の人々の同情によつてさして取れない葬式も済ますことが出來ました。それから七日間は草太郎は涙なが、毎日墓参に行つて居りましたが七日目に墓参から歸つて來ますと、自分の家の中に人が居るやうです。伯父が知らと思ひながら入つて見ますとそれは鬼のやうに無慈悲な金貸の金造でした。

「あ、草太郎さんかい。毎日墓参りは孝行なことです。それにしてもお父さんほどんだ御災難で、お悔み申し上げますよ。」

「有難う存じます。」

さう云つた草太郎は、金造が何を云ひ出すかとおど／＼してゐますと、

「今日俺の來たのは外でもないが、お約束通り食金のかたにこの家とお前とを賣ふから



その心算でなさい。」
 と急に言葉の調子を變へて申しました。あ
 あい／＼来たのかと草太郎は思いましたが、
 『御承知の通り父があつた非業の最期を遂
 げてしまつたのですから、どうぞそればかり
 は堪忍して下さい。この家は差上げますが、
 私の恨だけは赦して下さい。それといふのは
 私ほどかして父の仇討がしたいからです。』
 と草太郎は両手を疊べつき涙を流して頼み
 入れましたが、元より無慈悲な金造に聞き入



られよう筈がなかつたのでありました。
 『馬鹿云はつしやい。俺はこんな古ぼけた小
 さな家や、お前を奉公に取つたからとて五百
 兩の大金の半分になつて追付きやアしない。
 ぐつ／＼云はずにお前は俺の家へ奉公に来る
 んだ。そして一生懸命働いて親父の借金の埋
 合せをするんだ。』
 『でも素ばと云へば父が借りたのではないの
 です。』
 『そんなことは俺は知らん。取る可き権利が
 あるから取るんだ。』

三、父の亡靈

あるから取るんだ。』
 かうなつては草太郎も仕方ありません。
 兎も角も一時奉公にゆき一生懸命働いて折を
 見てお頼みしたら、また赦されぬこともある
 まいと、此所に決心して鬼のやうな金造の家
 に奉公にゆくことになりました。
 父は何者にか殺され、家は奪はれ、更に自
 分は一生奉公に取られて奴隷のやうな憂目な
 見なければならぬ草太郎少年の心のうらばど
 んなに辛かつたでせう。
 もう夕暮方で村々の寺の鐘が太く、寂しく
 野の道を傳うて響きます。草太郎は心の中か
 ら潮のやうに満ちて来る悲しみを、やつとの
 事で堪へて金造の後について、とぼ／＼と歩
 んでゆきました。
 とある寺の側を通りますと、其處の杉の枯
 枝にとまつてゐた鳥が、
 『阿呆、阿呆、阿呆』
 と啼いてゐました。金造は

と泣つて手で追ふ眞似をしたら、鳥は
 尙も『阿呆、阿呆』と鳴きつけて向ふの方へ
 飛んでゆきました。草太郎は何んとなく、一
 生奉公に連れられてゆく自分が、鳥に追馬鹿
 にされてゐる様で残念でなりませんでした。
 そのうちに周囲は暗くなつて、西の空には
 三日月が哀れ氣に出てゐました。或森の側を
 通りますと、今度は鳥の啼く聲がしました。
 『ボロスケ奉公、無駄奉公。』
 と啼くのを聞くと、流石に固い決心の草太
 郎も悲しくなつて思はずほろりと涙を流しま
 した。それにしても自分は無駄奉公にゆくか
 が知ら、と考へました。成程考へて見れば父
 の親切から他人の借金の保証になり、遂に父
 の身に掛掛つて来て、そして終には自分が奉
 公にゆかねばならぬ……如何に世の中の廻り
 合せとは云ひながら、それはあまりに情ない
 事だと、草太郎はつく／＼想ひました。けれ
 ども何んと言つてもまだ十四の少年である草
 太郎にはどうすることも出来ませんでした。
 『よし、自分はどんなつらい事も辛抱しよう
 として二三年経つて一人前になつたら、逃げ

出してやらう。その時こそ父の敵討をし、眞
 先傳來の賣である香爐を取り返さなければな
 らない。』
 と、固く決心をいたしました。
 その翌日から草太郎は、鬼の金造の爲めに、
 牛馬のやうにこき使はれました。朝は空の白
 む頃から夜は曉くまで、然る／＼食物ら
 しい食物も與へられずに働かせられたのです
 草太郎も今こそ落ぶれてゐましたが、三年前
 までは近衛近在切つての豪家の坊ちゃんとし
 て、人に後指さへ指されずに暮した身の上で
 あるのに、如何に世の移り變りとは云ひなが
 ら、こんな牛馬のやうな取扱ひを受けて働か
 ればならぬとは、何といふ情ないことであら
 うと、時には籠打つ籠を持つたまふ仕事場の
 窓から差す月を仰いで、嘆息を洩すこともあ
 りました。
 草太郎は辛いくと思ひながら一年の日は
 過ぎました。今ではやうやくその辛さにも慣
 れまして、初めの内ほど身に感ずることもあ
 りませんでした。然し、生來學問の好きな草
 太郎は人目を忍んで本を讀みました。二宮

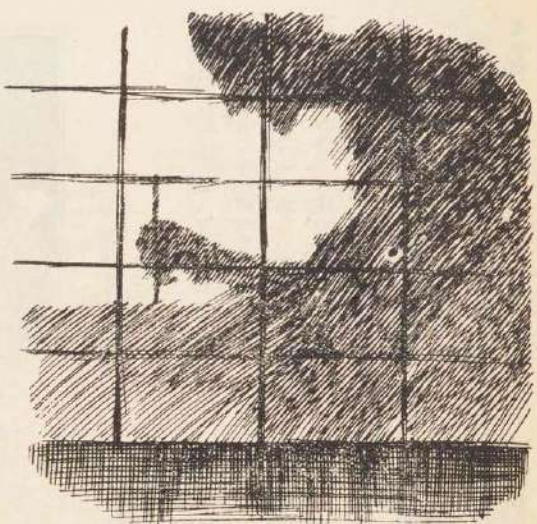
尊徳のしたと云ふ風に、行儀に清徳をかけて
 光を照し、深夜に於て勉強しましたが、さう
 いふ事は幾度も金造に発見されてその度毎に
 御飯を食べられない罰を受けました。さうし
 た事が度重なつた爲に、草太郎の體は大分衰
 へて來ました。病氣こそしないが、瘦せ細つ
 てしまつたのでした。
 その頃、草太郎が父と共に住つてゐた家は
 金造の手から他人に賣られて、或豪家の隱居
 が遣入つてゐましたが、恰度父の殺されてか
 ら一年目の初秋の頃、その家に幽霊が出る
 いふ噂がばつと立ちました。何んでも雨の降
 る晩に限つて怪しいことがあるといふので、
 その隱居も初の内こそ、何アに高の知れた幽
 霊がと思ひましたが、だん／＼度重なるにつ
 れて恐ろしくなつて、忽ち他人に賣つてしま
 ひました。次に住んだ人はある侠客のおかみ
 さんで、主人が留守がちなので、女中と二人
 で住んでゐました。勿論その人はそんな怪
 しい噂も知らなかつたのでした。暫らくす
 ると或日雨が降りました。もう寒い風が雨に
 混つて戸障子に吹きつける頃です。

「何誰でございます。」
 「かねや、早く燈火をつけておくれ。」とおか
 みさんは叫ぶやうに云つて、やがて女中のつ
 けた行燈を外の方へ差向けて見ましたが、人
 らしい影は見えませんでした。おかみさんは
 不思議に思つて提灯をつけて庭のあたりを探
 しましたが、矢張り人の影などはありません。
 その上、人が歩んだらしい足跡さへ見えな
 いのであります。

「開けて呉れ、開けて呉れ。」と申します。は
 て、主人の聲とは違ふが誰だらうと思ひまし
 た。おかみさんは、

「何誰でございます。」
 と申して答へると、矢張り同じやうに力ない音で
 戸を叩いて、

「開けて呉れ、開けて呉れ。」と申します。不
 思議に思ひながらおかみさんは立つて兩戸を
 一枚開けました。すると急に夜の風がさーア
 と家の中へ入つて、ふつと燈火を消してしま
 へました。おや、失敗つたと思ひながら外を
 見ると白いぼんやりした影が立つて居ります。



外に洩れてゐるのでした。それは戸の節穴か
 ら洩れた光が、庭の葉に當つて光つてゐる
 ので知れました。

「かねや、早く燈火をつけておくれ。」とおか
 みさんは叫ぶやうに云つて、やがて女中のつ
 けた行燈を外の方へ差向けて見ましたが、人
 らしい影は見えませんでした。おかみさんは
 不思議に思つて提灯をつけて庭のあたりを探
 しましたが、矢張り人の影などはありません。
 その上、人が歩んだらしい足跡さへ見えな
 いのであります。

「開けて呉れ、開けて呉れ。」と申します。は
 て、主人の聲とは違ふが誰だらうと思ひまし
 た。おかみさんは、

「何誰でございます。」
 と申して答へると、矢張り同じやうに力ない音で
 戸を叩いて、

「開けて呉れ、開けて呉れ。」と申します。不
 思議に思ひながらおかみさんは立つて兩戸を
 一枚開けました。すると急に夜の風がさーア
 と家の中へ入つて、ふつと燈火を消してしま
 へました。おや、失敗つたと思ひながら外を
 見ると白いぼんやりした影が立つて居ります。

でした。

草太郎はさうした噂を聞くにつけても、父
 がどんなに無念だったかを想像してどうして
 も敵を討ち、香爐を取り返さなければならな
 いと思ふのでした。

「今夜は、折だ。あのなつかしい家を外か
 らでも一目見て行かう。」と思つた草太郎は、
 そのまゝ寄り道をして、以前の我家の前に立ち
 ました。その夜は、月夜でぼんやりながら、
 昔のなつかしい我家を見る事が出来ました。
 でも父がよく草花、ちりぢりなぞした小庭には草
 が蓬々と生えて、入口の戸にも藁が溜つてある
 始末でした。屋根こそ傾かないが、如何にも
 變りかけて我が家の姿でした。

「開けて呉れ、開けて呉れ。」と申します。不
 思議に思ひながらおかみさんは立つて兩戸を
 一枚開けました。すると急に夜の風がさーア
 と家の中へ入つて、ふつと燈火を消してしま
 へました。おや、失敗つたと思ひながら外を
 見ると白いぼんやりした影が立つて居ります。



狸の財布

藤森 淳三

露西亞のお話です。

時々人間に化けて旅人を困らせるばかりでなく、偶には村の百姓家へ這入つて、鶏やお魚を盗んだりもしました。しかし、盗つて来たものは、決して自分一人では食べません。必ずお互ひに分けあつて、仲よく暮してをりました。

そのうちに冬になりました。或日、狐は狸に云ひました。「お、狸さん、また復活祭が近づいて来たね。今年もお腹一つばい御馳走を食べたいものだね。」

皆さんも御存知の通り、露西亞では基督様が蘇生られた日をお祝ひして、復活祭と云つてゐます。そして、復活祭には

露西亞の中に、狐と狸が住んでゐました。この狐と狸は至つての悪戯者でどの家でも、うんと御馳走を拵へてお祭りをする習慣になつてゐます。

ですから、狐と狸も、その日村の百姓家へ行けばいつもよりはすつと美味しい御馳走を盗つて来られるので、ふだんからそれを何よりの楽しみにしてゐるのです。

「さうだ。此頃はとんと御馳走を食べないが、早く復活祭になればいいなあ。」

と、狸も嬉しさに、さう云ひます。すると、狐がかう云ふのです。

「そこで狸さん、ひとつ相談があるのだがね。と云ふのは、外でもないが、毎年々々村の百姓家の御馳走には、もう僕は厭いてしまつた。僕が思ふのでは、町の御馳走は大へん美味しいやうだ。何んとかして、それを食べられないものかねえ。」

成程さう云はれて見ると、狸もそんな気がしますが、どうしたらそれを盗つて来られるか、狸にはいゝ智慧も出ません。

「だが、それは大分むづかしいよ。何んでも町の家は戸に鍵がかゝつてゐるといふぢやないか。だから、到底這入れつこないと思ふね。」

二

狐はそれを聞いても、なか／＼町の御馳走が思ひきれません。そこで、いろ／＼考へぬいた末、たうとううまいことを思ひつきました。



狐が附くと、それは今までに一度も通つたことのない道へ出てゐました。

狸は不審に思つてたづねました。

「おい、狐さん、道を間違へやしなかつたかな。」

「なめに、こちらのほうが近道さ。」

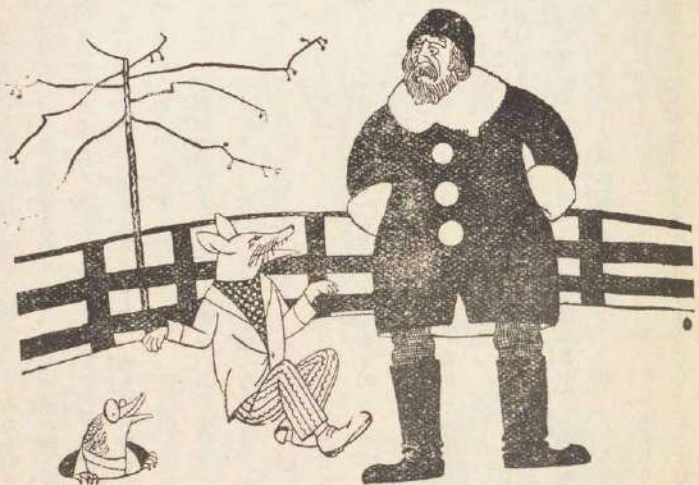
狐はさう云ひながら、どんく先きになつて歩いて行きます。それで狸も仕方なしに後をつけて行きますと、はるか向ふに森が見え出した時です。狐は後ろを振りむくが早いはいきなり狸を道傍から押しころがしました。

不意を打たれた狸は、その機みにころ／＼と轉けると一緒に、雪煙りを揚げて、ドスンと穴の中へ陥ち込みました。

さあ大へんです。狸は陥穽へ陥されたのです。この陥穽は人間が鹿などを捕るために拵へてあつたのでした。狐はふだんからそれを知つてゐたのです。

四

狐は狸がうまく陥穽へ陥ちたのを見澄しますと、さつきの道を後戻りして、直様、財布を擲り返しました。そして一生懸命に逃げ出しました。山と云はず、窟と云はず、野と云はず、



す、畑と云はず、時々立止つて後方を振り返つて見ては、走りました。

さうして二日二晩走り續けて、もうたとひ狸が陥穽から出て追つてくまいと思ふ頃、ふと道傍で、もぐらもちの足を踏みました。

「痛い。痛いぢやないか。」

もぐらもちは日向で晝寝をしてゐたのを起されたので怒りました。

「勘辨してお呉れ。少し急いだから。」

狐がさう云つてあやまりますと、もぐらもちは唐突に立上つて、狐が持つてゐる財布をひつたくつてしまひました。

狐は吃驚しました。が、もうもぐらもちは、穴の中へ還入つてしまつたのです。

「もぐらもちさん、後生だから財布を返してお呉れ。」

狐はさう云つて、しきりにたのみました。しかし、地の下のもぐらもちは何んとも返辭をしません。たうとうおしまひに、狐はそこへ坐つたまま、泣き出しました。

聞もなく、村長様が通りかゝりました。

「何を泣いてゐるのだ。」

村長様は狐にさうたづねました。

「お願いでございます。もぐらもちが私の財布を奪つてしまひました。村長様、どうぞ、財布を私に返すやうに仰つて下さいまし。」

狐は泣顔を上げて訴へました。すると、もぐらもちは地の下から、

「い、え村長様、狐の申すことは嘘でございます。この財布は私のです。」と云ひました。

「い、え、もぐらもちこそ嘘を云つてゐるのです。」

「い、え、狐の云ふのは嘘です。」

狐ともぐらもちは、お互ひにさう云ひ合ひました。

五

狐ともぐらもちが互ひに云ひ張りましますので、村長様も、どちらが本當なのか分らなくなりました。そこで村長様は、狐ともぐらもちを火の中へ入れて、どちらか先きにあついと云つたはうが負けで、いつまでも我慢したはうが財布の持主だといふことにきめました。

さて翌日になると、役人達は、狐ともぐらもちを引立て、行きました。用意は出来てゐました。早速、薪が積み上げられて火が點くと、狐ともぐらもちはその中に入れられました。火は忽ちのうちに燃え上がりました。役人は云ひました。

「さあ狐、あつかいか、どうだ。」

しかし、狐は實際はあつくつて堪らないのですが、「あつくない、あつくない。」と強情を張つてゐます。

「もぐらもちはどうだ。あついなら、あついと云へ。」

役人は今度は、もぐらもちにさう云ひました。が、もぐらもちらは先刻から地の下に潜り込んでゐますので、あつくも何んともありません。ですから、

「あつくない、少しもあつくない。」と、如何にも平氣な聲で答へました。

狐はもう堪つたものでありません。間もなく火は、からだぢうの毛に點いて、ぢり／＼と不氣味な音を立てはじめました。が、それでも狐は齒を食ひしばつて、噫にもあついなんて口に出すまいとします。そして、今にももぐらもちがあついつて云ふだらう、もぐらもち降参するだらう、と、そればかりを待つてゐました。

りを待つてゐました。

かうして、狐はたうとう焼け死んでしまひました。——皆さん、全くうまい話ぢやありませんか。狐が死んだので、あの財布はもぐらもちのものになつたのです。

しかしそれから二日目、復活祭の晩のことです。町はお祭りで大へん賑かでした。で、もぐらもちもその日は特別におめかしをして、あの財布を持つて行つたのです。そして、パン屋へ這入つて、お菓子を買ふつもりで、さて財布を開けて見ますと、まあ何んと云ふことぞう。中からは一本の古釘が出て來ました。

——全く不思議なこともあるものですね。あの時理が入れたお金、どうして古釘に變つたのでせう。皆さんはそれをどうお考へになりますか。わたしは、事によるとそれは神様のお仕業ぢやないかと思ふのです。

もぐらもちですか。もぐらもちらは、その古釘を見ますと、その時ちよつと呆氣にとられた容子でしたが、餘程それが癪に障つたものと見えて、いきなり財布ごと道路へ叩きつけたといふ、それはパン屋の小僧の話です。(なほり)

水滸傳 (第二回) 宮島資夫



黒旋風李達 (つゞき)

薄陽江で宋江が戴宗に逢つてから間もなく、宋江が酔つて壁の上に落書したのが原因となつて大騒動が起りました。さうしてそれが爲に宋江も戴宗も役人にかまつて首を斬られさうになつたのですが、もう一息といふ所へ梁

山泊の人達が暴れ込んで來て宋江と戴宗を救つて梁山泊に連れて歸りました。その時罪もない宋江を殺さうとした黃文炳といふ上役の者までも殺してしまつたので、その日までいくら勸められても梁山泊に入る事を承知しなかつた宋江も、遂に意を決して、仲間に入るこゝとなつたのです。

宋江が山に入ると、これに従つて戴宗も李逵も張順も仲間入りをしてしまひました。それまで梁山泊に籠つてゐた晁天王とか智多星吳用などは、どうかしてこの徳の高い山東の及時雨宋江を自分達の仲間に入れ、ば、天下の豪傑は風を慕つてすぐに集つてくるのだと考へてゐたものですから、色々手段を盡して見たのに中々うんと云はなかつた宋江が、たうとう山に來ることとなつたのでよく、梁山泊の運の開ける時が來たのだと、皆なは喜んで、牛や鹿を殺したり色々な御馳走を作つたりして、毎日々々山の中の歡迎會が續きました。すると或日宋江は一同の豪傑に向つて、
「私はかうしたつまらない人間なのに梁山泊に來ると皆さんから大切にされ

てこんな嬉しい事はありません。けれども私がこの山に入つたことが政府に知れたら、きつと國にゐる私のお父さんや弟を捕へに行くに違ひありません。それだから私はともかく父と弟を迎へに行つて来たいと思ふのですが。」と云ひ出しました。これを聞いてゐた人達は、誰も宋江の親孝行なことを知らないものはないのですから、

「それでは早く行つていらつしたら好いでせう。」とすぐに賛成しました。翌日宋江は一人して故郷の郟城縣へ向つて出發しました。

宋江が行くとすぐに吳用は、多勢の豪傑連に商人や百姓のやうな姿をさせて、宋江のあとから見え隠れに護衛して行かせました。それだから宋江は、故郷へついでお父さんと弟とを迎へて

歸つて来る道すがら、悪い役人に一度はつかまりましたが、その豪傑達の働きで、すぐに救はれて山に歸つて來ました。

宋江のお父さんが山に來ると、一同はまた大変なお祝ひをしました。するとその時、公孫勝といふ一人の豪傑が座の中から進み出て、

「私もこの山に來てから、多くの豪傑と親しく交つて、楽しく暮してゐるた爲に逢ふその日その日を忘れて暮してゐましたが、國元にある母親がどうしてゐるかと思ふと心配になつて來ました。それに私の大事な先生にも久しく御無沙汰してゐるから一度故郷へ歸つて母の安否を尋ねて来たいと思ひます。」と云ひ出しました。

この公孫勝といふ人は、百八人の中

「何を君は泣いてゐるのだ。」と宋江がそばに寄つて尋ねますと、

「あなたは國へ行つてお父さんを迎へてくるし、公孫勝は國へ歸つてお母さんに逢つて來る。皆なは私に父も母もないと思つてゐるのか。」と駄々子のやうに云ひ出しました。

「何だつてそんな事を云ひ出したのだそれより君はどうしたいと云ふのだ。」と今度は晁蓋が尋ねますと、

「私も國に母があるが、兄は貧しい暮らしをしてゐるから安樂には養へない。それだからどうかして母をつれて來て奉行したいと思ふのだ。」

と李逵はまた泣きながら云ひました。「お前のいふことは決して無理ではない。それなら誰か二人の一人と一緒に行つて貰つてお母さんを連れてくるが

でたつた一人、道術の修めた人で、敵と戦ふ時に雲を呼び風を起したり、龍や虎の姿を現すことが出来る人なので大変大切な人でしたが、今そんな事を云ひ出したのを聞くと、晁蓋が、真先に進み出て、

「ほかの事と違つて、御老母の安否を問ひに行かれると云ふなら決して止めはしません。然し僅かの間でも別れるのはお名残り惜いから明日山を下ることなささい。」といつて更に公孫勝を主人公として別れの酒宴を張りました。

翌日公孫勝が旅装を整へて山を下る時には、山の豪傑達が皆なして、麓の金沙灘といふところまで送つて來て、酒を勤めて關關の曲といふ別れの歌をうたひました。その時、晁蓋はまた改めて、

「何だつてそんな事を云ひますと、

「いや駄目です。李逵は元來火のやうに短氣で事を仕損じると、それにこの前、江州城で人を殺した事もあるし、その顔つきは誰が見ても判るほど恐ろしい相をしてゐるから、山から出ればすぐに捕まるに違ひない。それだからもう少し時延した方がきつと好い。」と宋江が傍から云ひました。之を聞くと李逵は怒つて「何です宋長兄、あなたは自分の父さへ樂しませれば、人の母はどんなに苦しんでも好いと云ふのですかそんな事を云はないで、どうか母を迎へに行つて下さい。」と云ひました。

「それ程お前が行きたいと云ふなら、私に三つの事を約束するが好い。其さへ果せば今からでもたゞせてやるが。」と宋江が訊きました。

「え、どんな事でもきつと守ります。」と李逵が云つたので、
 「よし、それなら先づ第一に道中で決して酒を飲んではいけない事、第二にお前は元來氣が短くて喧嘩をするから人と一緒に持つてはいけない。一人でそうつと行つて早
 早歸つてくる事、
 第三にお前が平素
 から使ひなれた斧をこゝに置いて行くこと、それだけだがどうだ。」
 と宋江が尋ねました。
 「え、きつと守ります。それならばこれからすぐに行



つて急いで歸つて来ます。」と云ふとすぐに李逵は、一振の刀を腰にさけたままで、皆に別れてさつさと駆け出して行つてしまひました。
 「あの通りだから李逵には困る。」と宋江は思はず獨り言を云ひました。それ

から居並んでゐた豪傑達に向つて、
 「どうでせう諸君、李逵の平素からの短氣な性質を考へると、決して無事に道中を過すわけには行くまいと思ひます。ところで此際誰かに頼んで、そつとあの男の後見役をして貰ひたいと思ふのですが。」と相談しました。
 「いや全く宋長兄のいはれる通りですあゝいふ短氣な男が一人で歩いてゐたら何を仕出來すか解りません。が、さて後見役には誰が一番好いかしら。」と皆で評議をはじめました。すると杜選といふ人が進み出て、
 「麓の酒店で斥候の役を勤めてゐる朱貴は、李逵と同じ村の人間だから、あれをやつたらどうです。」と云ひ出しました。
 「さうだ、さうだ。それなら朱貴が好

い。」とそこで休むやつて朱貴を呼びよせて、後見役になつてくれと頼んだので、朱貴はすぐに李逵のあとを追つて立てつて行きました。
 一方の李逵は、梁山泊の麓で一同と別れるとそのまま、どん／＼急いで故郷の沂水縣を指して走つて行きました。それで四五日するとやつと沂水縣の境の處に來ましたが、城の西門の所に多勢の人が集つて、何か立て札を熱心に眺めてゐるので、李逵も思はず傍に寄つてその札を眺めると、そこでは第一名の正賊は郟城縣の宋江、第二名の賊は江州の戴宗、第三名の賊は、沂水縣の李逵と記してありまして、尙傍に宋江を捉へた者には一萬貫、戴宗を捉へた者には五千貫、李逵のは三千貫の賞を與へると書いてありました。

流石の李逵も心の中に少し驚いて、勞へ込んでゐますと、誰かしらないが後から不意に背中を叩いて、
 「やあ李逵さん、どこへ御出掛です。」と云ふものがありました。李逵はぎくりとしながら振り返つて見ると、朱貴がにこ／＼しながら立つてゐるので、
 「何だお前か、なんだつてこんな所まで來たのだ。」と尋ねました。すると朱貴は、
 「まあ何でも好いから一緒に來い。」と人のあるない處へ連れて行つて、
 「おいお前は何だつて自分の事を書いてある立て札の前に立つて眺めてなんかゐるのだ。まるで自分からさあ捉へてくれと云はないばかりぢやないか。こんな事がありはしないかと思つて宋長兄が私にお前のあとから行けと云は

れたので、一日連れてやつて來たが、お前より私の方が先に來てゐた。お前は途中で何をしてゐたのだ。」と叱つたり問ひつめたりしました。
 「いや私は宋長兄から酒を飲んではいけないと云はれたので、酒もやめて怒つとやつて來たのだ。それはさうとお前は此の村の出の者だから、あすこの酒屋ともよく知つてゐるだらう。二人なら大丈夫だから、どうか私に一杯のませてくれ。」と李逵はたまらなさうにねだりました。恐い顔をしてゐても、その様子がまるで子供のやうなので朱貴も笑ひながら、
 「あれは私の弟の朱福と云ふものがやつてゐる所だ。餘り可哀想だから一杯位は飲ませてやらう。」と云つてその店に連れて行きました。さうしてそこ



で二人は澤山お酒を飲んでゐる中に、やがて日が暮れて、夜も少し更けて来ました。すると李逵は、

「今夜は幸ひに月もよし、道もよく判るから、夜の中に行つて母を連れて来た方が安全だらう。私はこれから百丈村まで行つて来るからお前はどうかここに待つててくれ。」と朱貴に云ひました。

「成程、それはさうかも知れないから行つて来るが好い。然し、少し位近くつても小路を行つて間違があるといけないから東の方の大路を行くが好い。」と朱貴は再三再四丁寧に道を教へてやりました。李逵は「よし」と云つて表に出ましたが、なに追割や獸位恐れるやうな李逵ではないのだ、誰が廻り道なんかするものか、と心の中で

怒へながら小路の方へどん／＼駈けて行きました。

やがて二三里も来たと思ふと、向ふの方に深い林が見えました。その邊りは一體に月の光も透らないので、薄氣味悪いほど暗くなつてゐましたが、いま李逵がどん／＼と駈けてくると、林の中から忽然と一人の男が飛び出して行手の方に立ちふさがりました。何者だらうと思つて李逵は闇をすかしてちつと眺めると、両方の手には大きな斧をさけ、顔の色は墨よりも黒いやうな男でした。李逵は丁度自分が斧を持つた時と同じやうな姿をしてゐるのを見て、何となく可笑くなりましたが、「人の行手の邪魔をする奴は何者だ。」と例の雷のやうな聲で唼鳴りつけました。すると曲者は、

「おは」と笑つて、「生意氣な事を云ふな。それよりも俺の名を聞いて震へ上らない用心でもしておけ。いま天下の豪傑として名も高い黒旋風の李逵とは俺の事だ。」と威張り返つて李逵を睨みつけました。それを聞くと李逵は可笑しくつて堪らなくなつて大きな聲で

「わつはつはつは」と笑ました。そして「貴様みたいなバカがあるか。俺こそ真正正銘の黒旋風李逵なのだ。俺の名をかたつてよくも追割なんかをして人の名を汚したな。」と云ふより早く刀を抜いて切つてかゝりました。すると僞者の李逵は驚いて、慌てゝ逃げようとしたが、李逵は素早く飛びかゝつて、脇腰を丁と蹴たので、ぱたりとそこに倒れてしまひました。

「何だ李逵の名をかたるほどにもない弱い奴だな。貴様がこれまでこの斧で人を脅かしたのなら、今日は俺が本當の斧の使ひ方を教へてやる。まつ右の腕から叩き落してやらうか。」と落てるた斧を取つて振り上げました。すると曲名は両手を合せて、

「豪傑、どうか命だけは助けて下さい。實は私は決してこんな事をしたくはないのですが、たつた一人の母が年老て困つてゐるものですから、ついこんな悪い事をはじめました。さうして私の本當の名が李鬼と云ふものですから、それからふと思ひついて二つの斧を持つて出て、あなたの眞似をして、黒旋風の李逵だと云ふと、誰も彼も荷物や捨て、逃げて行くのです。それで漸う母を養つて來てゐました。今私が死んだら、年寄の母も餓死をしなければ



ばなりません。それが可哀想だと思つたら、どうか助けて下さい。」と涙をこぼして頼みました。李逵はそれを聞くと、いきなり斧を投げ出して、

「さうか、貴様のいふことが本當なら俺もいま年寄の母親を迎へに行つてやる。しかし今後もし俺の名をかたつてこんなことをしたのが判つたら、その時は許さないぞ。さうして貴様も親に孝行がしたいのなら、早くこんな事はやめて、真面目になつて働くが好い。」と云つて一錠十兩と云ふ銀の貨を出してその男に與へて、また先を急ぎました。そんな事をしてゐた爲に暇を取つたので、もう夜もだんだ

んと明ける頃になつて、山の凹の處にやつて來ると、一軒の酒店がありました。李逵は駆け通して來たのでお腹もすきましたから、この酒店を起しますと一人の女が出て來ました。

「私は道を急ぐものだが、金を一貫文拂ふから愈いで朝飯をつくつてくれ。」と注文してその家の裏の方をぶらぶらしながら、山の中の朝明けの景色などを眺めてゐました。するとまた向ふの方から、一人の男がどしく、駆けつけて來るので、李逵はふと物蔭に身をひそめて隠れてしまひました。男が來ると先の女は慌て、外に出て、

「まあ、大變歸りが遅かつたではありませんか。」と心配さうに云ひました。

「いや先刻はそれはひどい目に會つてもう少しで殺されてしまふ所だつた。」

と男はほつと息をつきました。

「まあどうしてです。」と女は氣遣はしさうに尋ねました。

「いや今日と云ふ今日はやり損なつたこつちは例の通り黒旋風だと云つて飛び出したら、向ふが眞物だつたので、すぐと蹴倒されてもう少しで殺されさうになつたのを母親が年を老つて困つてゐると云つて駄したら助けてくれた上に銀十兩をくれたが、こんな恐ろしい事はなかつた。」と先刻の事を話しました。すると女は、「大きな聲を出したら駄目ですよ。その男は今朝飯の註文をして裏の方をぶらぶらしてゐます。それでは痺れ藥を使つて、あの男を捉へれば大した御褒美が貰へるからさうしませうよ。」と女がいふと、男はすぐそれを賛成しました。

物蔭でこれを知つてゐた李逵は眞赤になつて怒りました。

「先刻は命を助けた上、金までやつたのに不埒な奴だ。」と思ふともう堪らなくなつて、刀を抜くと雷のやうな聲を張り上げて躍り込んで、男の首をいきなり切り落してしまひました。然し女はその暇に素早く逃げて行つてしまつたので、その家に火をかけて焼き拂つて、百丈村を指して急いで行きました。李逵は漸く自分の家へ歸りましたが李逵の兄さんの李達といふ人は、李逵の顔を見ると、

「貴様はまだ私達に苦勞がかけたたくつて歸つて來たのか。今お前の首は三千貫といふ賞金つきで探されてゐる。もしお前がこの家で捉つたら、それこそ私達まで殺されなければならぬ。」と大

變に怒りました。

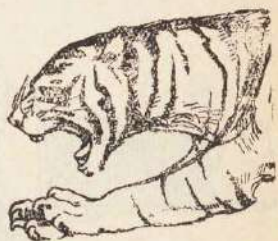
「いゝえ、私は今度立派な官職に就いたので、お母さんをお迎へに來たのです。」といつて李逵に、「どうかお母さんを渡してくれ。」と頼みましたが、「飛んでもない事だ。お前は梁山泊にゐると云ふことがよく判つてゐる。それにお母さんが渡せるか。どうしても連れて行くと云ふなら近所の人を呼んで來る。」と云つて、李逵は表へ駆け出して行きましたが、その際に「お母さん、好い處へ伴れて行つて上げます。」と云つて、年老つて眼の見えなくなつた母を背負つて李逵はそこに五十兩の銀を置いてこの家を出てしまひました。兄の家を出ると李逵はもう滅茶滅茶に駆け通しました。其日一日駆け通して、日の暮れ頃にやつと來たのが



「お母さんが一咽喉が濡いたから水を一杯飲ませてくれ。」と云はれるので、その邊を探すと、漸う小さな古寺があつたので、その中にお母さんを下して谷間へ水を汲みに行きました。

李逵は足場の悪い道を下つて、やつと一碗の水を汲んで元のところへ歸つて来て見ると、もうお母さんの姿が見えないのです。流石の李逵も飛び上るほど驚いて四邊を見廻すと、向ふの方の草の上に血の跡があるのを発見しました。李逵は益々驚いて、そのあとを段段駈けて行くと、やがて一つの洞

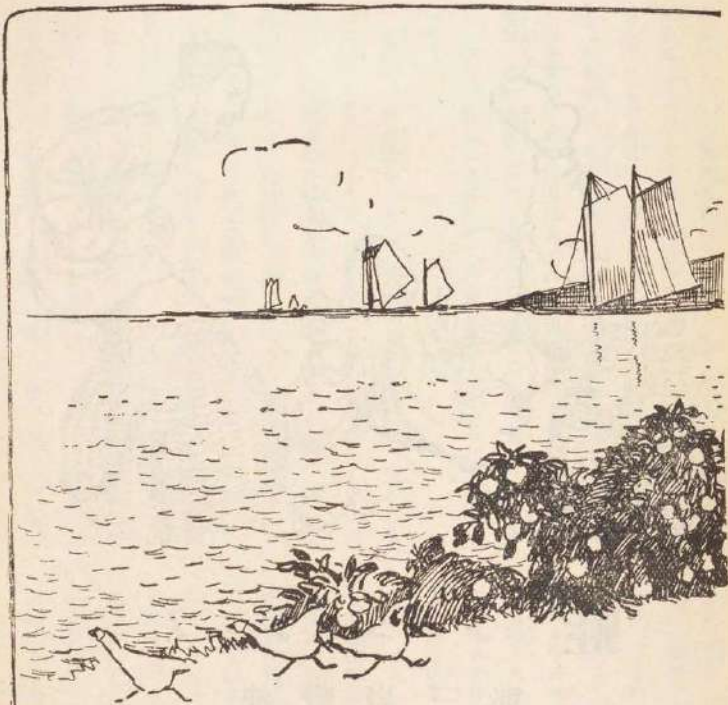
があつて、その中に二匹の子虎が人の腿をほりくく喰つてゐるのでした。それは紛れもない大切な母の死體であると思ふと、李逵の怒りは烈火のやうに燃え上りました。李逵は鬚の毛を逆立て鬚をゆるがせて、洞の中に飛び込んで、すぐに二匹の子虎をすたく／＼に切り捨て、しまひました。さうしてまだ親虎はゐないかしらと、洞の口をさまよつてゐますと、向ふの山から母虎が怒り吼えて駈けて來ましたが、李逵は刀を取り直すと、すぐにその肩間に切りつけて殺してしまひました。すると今度は物凄い風がさあつと吹いて來て、四邊の木の葉を雨のやうに降らせるのです。是れはきつと餘程大きな虎が來るのだらうと刀を執り直して待つてゐると、前にも盛した大きな



虎が松の木影から飛び出して來て李逵に飛びかかりました。けれども李逵が素早く身をかはしたので、虎は益々怒つて、山中に響き渡るやうな聲で吼えながら、牙を張り爪で大地を掻きむしつて再び飛びついて來た時に、李逵はひらりと身をかはすと同時に、刀



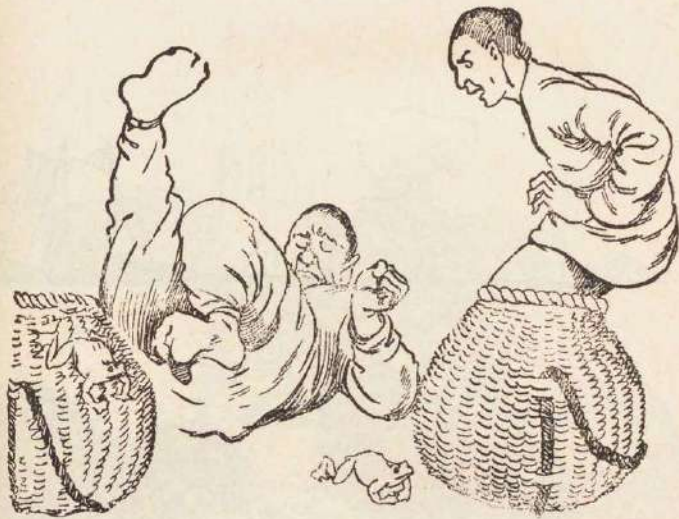
を振り力を籠めてまた虎の肩間に切り込みました。虎は一壁高く霹靂のやうな叫び聲を揚げると共に、撞つとまゝに倒れてしまひました。然し流石の李逵も四目目の虎を殺してしまふとがつかりしてそこに倒れて眠つてしまひました。そして翌朝になつて泣く泣く母の骨を拾ひ集めてまた梁山泊を指して歸つて行きました。その途中で、李逵が殺した偽李逵の女の爲に訴へられて一度は捉まりましたが、すぐと宋貴に助けられて無事に山へ歸つて行きました。折角迎へに行つたお母さんを虎に喰はれてしまつた李逵は、宋江の前に出ると子供のやうに泣いてその事を話しました。さうしてお母さんの骨を懸ろに、梁山泊の奥に葬つて大切に供養したと云ふ事です。(つゞく)



千鳥
 波はさんぶと
 渚に
 寄せて
 驅けて歩いて
 啼いた啼いた
 千鳥



和歌の浦
 (名所めぐり童謡の三)
 野口雨情
 船は帆かけて
 四國へ
 渡る
 沙を踏み踏み
 啼いた啼いた



蛙ンコンメ

沖野岩三郎

昔、朝鮮の義州といふ所に安面根といふ老人がありました。面根は四十の年、奥様に死なれたので、六歳になる景雲といふ一人の男の子を大事に育てました。所が景雲は、どうしたものか、お父様のいふ事は一から十まで反対しました。静かにしろと云へば、騒ぐ、騒げといへば、黙つて坐つてゐる。早く行けといへば、ほつりほつりと歩き、緩々行けといへば、大急ぎに走るといふ風で、毎日々々お父様の面根を困らせてばかりでした。けれども大人になれば、その根性が直つて来るだらうと思つて、我慢してゐました。が、十五になつても甘歳になつても、ちつともその性質は改りませんでした。或日の事、父の面根は、景雲を膝元へ招いて、

「景雲、お前ももう廿歳を過ぎたのだから、

半年から、一つ商賣を始め御覽。こゝに私の貯金が二百兩ある。これをお前に與けるから、町へ行つて、お前の氣に入つたものを買つて来て、それを商つてみるが宜い。しかしこのお金は、私が節儉に節儉して貯めたお金だから、變なものを買つて来てはいけません。同じ商賣をするにも、善い商賣と悪い商賣とがありますから、成るべく可愛くつて、美しくつて、皆なに喜ばれるものを賣るが宜からう。」と申しました。

景雲は、お父様からその二百兩のお金を戴いて、家を出ましたが、三日たつても五日たつても、ちつとも歸つて来ないので、お父様は毎日毎晩表へ出て、今か今かと景雲の歸りを待つてゐますと、八日目の夕方、西の方の畑の間の徑路に大きな籠を二つ擔いで来る景雲の姿が見えました。

「来た、来た、景雲が来た。何を買つて来たらう。」と云ひながら、門の所まで出迎へて、

「おう、景雲、大變遅かつたネ、一體何を買い集めて来たんだい？」と尋ねました。すると景雲は、

「お父様の仰しやる通り、私は、可愛くつて、美しくつて、

そして皆なに喜ばれるものを買つて来ましたよ。」と云つて、二ツの籠をどツかと庭に据ゑました。

「あ、さうか。どんなに可愛い美しいものか、早くお見せ。」面根はさう言つて、籠の中を覗き込みましたが、丁度その時はもうお日様が、とつぷりと西の山の端に入つて、あたりが薄暗くなつてゐましたので、籠の中に何が容れてあるのか、はつきり判りませんでした。で、面根はその籠の中へ兩手を突き込んで、中にあるものを掴んでみますと、ギユ、ギユ、ギユ……と、いふ氣味の悪い聲が聞えました。

面根は喫驚して手を引きました。そして、

「景雲、景雲、これは一體何です？」と云ひながら、籠を家の中に持つて行つて、蠟燭に火を點けて見ますと、これは先ア、何といふ嫌な事でせう。籠の中には、大きな蛙が何百となく、ウジョウジョしてゐました。それを見た面根は餘り喫驚したので、きやッ！と、いつて其場へ、倒れてしまひました。けれども景雲は沈着拂つて、

「お父様、これ程可愛くつて美しくつて、皆なに喜ばれるものはありませんよ。」と云つて、にや／＼笑つてゐました。

所がお父様の面根は、たうとう其晩から病氣になつて、寢込んでしまひました。

十日、廿日、病の床に就いてゐましたが、面根の病氣は、段々重くなるばかりで、お醫者様ももう全快の見込がないといふ事を、面根に云ひ聞かせました。そこで面根は景雲を枕もとに呼んで、

「景雲、私はもうやがて死ぬに違ひない。私が死んだなら、決して土の中に埋めてはいけないぞ。私は子供の時から水遊びが好きであつたから、どうぞ私の屍體は、あの鴨綠江の淵に沈めておくれ。くれぐれも頼むぞよ。」と申しました。それは景雲が、右と云へば左、前と云へば後といふやうに、何でも他人のいふ事を反對に考へる性質であるから、土に埋めろといへば水へ沈めるに違ひない。だから、水に沈めてくれと遺言すれば、そのアベコベに土に埋めるだらうと思つて、自分の思ふ事とは、正反對な遺言をしたのであります。所が景雲は、たつた一人の親に死なれた時、始めて今まで自分のして來た事が、皆な悪かつたと悟りました。そこでせめても、親の遺言だけなりと守らねばならぬと思つて、

「メーン、コーン。」と鳴き初めました。

土地の人々は、誰いふとなく、その蛙の鳴聲を聞く度に、「あれは、親不孝をして水に溺れた景雲が、お父様の名を呼んで面根々々といつてゐるのだ。」と言ひました。

このメンコン蛙は、世界中何所を尋ねても、朝鮮にだけしか産しない珍しい蛙だといふ事です。

賢い裁判官

朝鮮の忠清北道といふ所の山中に、一人の貧しいお坊さんがありました。或日自分の造つた履を清州といふ町へ賣りに行つて、二兩のお金を得ました。

お坊さんは大變貧乏でしたから、お金を容れる財布を持ちませんでした。で、二兩のお金をそのまゝポケットに入れて山の方へ歸つて行くと、路に新しい財布が落ちてゐるのを、見付けました。お坊さんはその財布を拾つて改めてみますと、中には二十兩のお金がありました。

お坊さんは唖驚して、また清州の町へ戻つて來て、或る飲食店へ入りました。そして其所の主人にその財布を預けて置い

面根の遺言通り、お父様の屍體を鴨綠江の淵に沈めて水葬に致しました。

それは五月の末でありました。景雲がお父様の水葬をすました翌日から、篠突くやうな大雨が降り初めましたので、景雲は川の傍へ行つて、お父様の棺が浮いて流れるのではないかと心配しながら、水の中を見詰めてゐました。

初めの頃は水の底に白い棺が見えてゐましたが、段々水が濁つて來て白い箱が見えなくなつたので、景雲は大きな聲で「面根、面根。」とお父様の名を呼び續けてゐました。

暫くすると川の中から、ぐうツと白い箱が浮上つて來ました。それを見た景雲は、

「お父様……。」と叫びながら川の中に跳り込みました。

其時はもう鴨綠江の河原に、白い石を見る事の出来ない程濁つた水が漲つて流れてゐました。だから景雲はお父様の棺を抱いたまゝ、渦の中に捲き込まれてしまつて、それっきり姿を見せませんでした。

所が不思議な事には、その翌年の五六月頃から、毎年々々鴨綠江の川岸に澤山の蛙が現はれて、賑やかな大きな聲で

て、町へ落し主を標しに行きましたが、出て行く時に、自分の持つてゐた二兩のお金も、その財布と一緒に預けて置きました。

お坊さんは町をぐるぐる巡つてゐると、向から一人の男がきよろくと、四圍を見廻しながら走つて來るのに會ひました。お坊さんは、

「もし、あなたは何か落したのではありませんか。」と尋ねますと、

「はい、私は財布を落しました。」と答へました。

「どんな財布ですか。」と問ふと、

「絹糸で編んだ細長い袋です。」と答へました。

「中には、お金が何程入れてありますか。」と問ひますと、その男は、

「二十兩半紙に包んで入れてありました。」と、はつきり答へました。

「夫が私が拾つて、あしこの店屋の主人に預けてあります。」お坊さんが親切に言ひましたので、男は大變喜んで、お坊さんについて、飲食店まで來ました。



裁判官は威めしい聲で、お坊さんに對つて、
 「其方が途中で、金二十兩容れてある財布を拾つたといふ申
 立は、飲食店の主人の證言に徴して、事實相違ないと認める。
 だからあの男の落したといふ金二十二兩容の財布と、其方の
 拾つた財布とは、全く別物であらうから、その財布と金二十
 兩とは其方に與へる。」
 と、申渡しました。

そこで三人は黙つて裁判所を出ました。しかしお坊さんは
 金二十兩と財布とを、落した男に渡して、自分の二兩だけを
 ボケットに容れて、急いで山寺へ歸つて行きました。

飲食店の主人は、其の裁判を大變面白がつて、来る人毎に
 その話をしてゐましたが、いつしかその事が王様の御前に達
 して、裁判官とお坊さんとは、宮中へ召し出されました。そし
 て裁判官は大變高い位に叙せられ、お坊さんは名高いお寺の
 住職になつたといふ事です。

財布を落した男も、その後改心してそのお坊さんの弟子に
 なつたといふ噂ですが、それは本當だか嘘だか確かには解り
 ません。(をばり)



「その二兩のお金も、私のものです。私はこの財布に二十二
 兩入れてあつたのです。」と言ひ出しました。

お坊さんは喫驚して、
 「この二兩は、私が自分で造つた隙を賣つて、受取つて來た
 男は俄に、
 ところでお坊さんは、飲食店の主人から、二兩のお金と、二
 十兩入りの財布とを受取つて、その財布を男に渡しますと、
 男は俄に、

お金です。」と云ひましたが、男は首を振つて、
 「いゝえ、そんな事はありません。私は確かに二十二兩入れ
 てあつたのです。」と言ひ張りました。

お坊さんと、その男とが、同じ事を繰返し、繰返し言ひ張つ
 て議論をしてゐるのを、見るに見兼ねて、飲食店の主人は、
 仲に入つて仲裁してみたが、財布を落した男は、飽までも二
 十二兩を、皆な自分のものだと言ひ張るばかりか、お終ひに
 は、お坊さんを泥棒だといつて罵り始めました。

そこで已むを得ず、二人は裁判所へ訴へ出しました。飲食店
 の主人も證人に出ました。

裁判所には賢い裁判官がゐりました。そして三人を一應取調
 べた結果、裁判官は財布を落したといふ男に對つて、
 「其方の申立てる事に間違ひはないと認める。其方の財布に
 は確かに金二十二兩容れてあつたに相違ない。」と申し渡しま
 した。

それを聞いた男は、得意になつて、それ見ると云はぬばか
 りに、お坊さんを尻目にかけて眺めてゐました。

お坊さんは、怒めしきうに裁判官の顔を眺めてゐますと、



童謡 野口雨情選

(第一部)

蜜蜂さん

宮城縣 高子英夫

蜜蜂さん
蜜蜂さん
お忙しい事
朝から晩まで
お勤めか
一寸休んで
蜜お呉れ

やま道

青森縣 坂本誠三郎

ほそ道こみち
山の道

いくつお山を
越したやら

ほそ道こみち
ごくらうさん
七つの山を
越しました

むかこ

千葉縣 和田莊三郎

零餘子 零餘子
零餘子 零餘子
零餘子 零餘子
零餘子 零餘子

鷺のお風呂

東京府 有賀 連

鷺のお風呂は沼のわき
お徳舌もずさん風呂の番
さらりと浴びて戻りやんせ
鳥は町から賑りがけ

山雀

東京市 桑原長太郎

一風呂浴びて戻りやんせ
可愛い、聲の山雀は
小さな箱のお窓から
おもて見ながら唄ひます
悲しい唄を唄ひます

寒坊主

東京市 嶋野時雄

寒坊主 どこへ
寒坊主 迎へに
木枯し 迎へに
向ふの 山へ

うし

京都市 福井勝秋

寒坊主 どこへ
風迎へに
向ふの 道へ
のつそり のつそり

ぼんやりだ

千葉縣 野口海郎

よだれだらく
のつそりく牛が
荷車載いて通ります

けさの山は
ぼんやりだ
近くの村も
ぼんやりだ

お月さん

京都府 松村峻岳

おともで
岡の上に
眺出した

(第二部)

日曜

愛知縣 植手ふみ子

日えうく
まる日えう
すつかり
あそんだ
まる日えう

かやの花

千葉縣 奥澤俊一

雀の子供は 朝の子供
雀はおてんとさんの
お使ひ子供

月夜

山梨縣 渡邊初子

かやの花は
きつねのしつほ
風に吹れて
ほさくしてた

兔さんのお餅つき

東京 池戸隆四郎

耳をすまして月見れば
餅つく音がきこえます
餅がついたら兔さん
私に一つ下さいな

いもの葉の玉

兵庫縣 戸田政治

学校の前の
小さな土橋
下に水ない
秋が来た

わすれつば

新潟縣 大塚一也

私の父さんわすれな草よ
昨日も今日もわすれな草よ
人形買ふのをわすれな草よ
今日も昨日もわすれな草よ
私しやるす番まちく草た

大ぐも小ぐも

東京市 加藤茂子

大ぐも 小ぐも
巢をはつて
蚊とろはへとろ蜻蛉とろ
何もとらぬに日が暮れた

はと

朝鮮 平野 好

土橋

和歌山縣 中尾司塚

露の子供は
夜の子供



若山牧水詩選

雨の道(賞)

東京府下修善村 日向も、子
天沼家原松林六

雨の道
妹と二人で花もつて行く
一つちつた二つちつた
三つちつた

野、きれいだん、雨も花もあなたも。
(秋水)

夕方(賞)

東京市外戸塚 新津マサエ
町源兵衛七六

むかし此町一番の
かねもちだつたと云ふ人が
みの虫のようにほろをきて
ねけりながらゐるいてた。

野、この外の八つともみなよかつた。
(秋水)

暮(賞)

東北市老松 武藤常子
町二ノ一六

パチンコ、チリンコ、パツチンコ
父様頭に手を上げりや
おぢさん煙草に火をつける
パチンコ、チリンコ、パツチンコ
父様頭に唾とまる
おぢ様負けたと手をたたく。

野、そばであなたが踊つてるやうだ。
(秋水)

はさみ

山形縣山邊校 佐藤ふみ子
尋四

私のはさみが
さあびた、さあびた、さあびた。
評、さうかや、さうかな、さうかや。
(秋水)

魚屋さん

廣島市信行社附 佐藤喜久代
廣済美校尋六

なんまんえ

綴方 編輯部選

或日の濱邊(賞)

北海道紋別郡濱 野坂契
津村川向四郎

力のない聲で、やつさやつさをかへ
漕ぎつけて来る一漕の漁舟があつた。僕
は思はず見とれて居ると、小屋の中から
数人の漁夫がおどろいたと異口同音
にさげびながら出て来た。小走に舟に近
づく、一人がこまつた事をしたと歎
息をもらした。すると舟に乗つて居た一
人が、實にきのどくなをしましたと言
ひ終ると、皆は顔を見合せて涙をこぼし
始めた。その時一人の女がかけつけて来
て、舟を見るなり舟縁に泣きふしてしま
つた。しばらくの間泣いて居たが、一番
丈の高い男がいつまで泣いて居ても限り
がない、話は後ですることに、さあ
ふねでもまかうとまきづなをひつぱり始
めた。
女の人はまた聲を立てて泣ながら小屋
の中へはひつて行つた。男の人たちは何

か語をしながら涙のこもつた聲で、やつ
さ、えんやほ、やつさ、えんやほと力な
く捲いて居る。
しばらくの間見とれて居たが、藤川君
の行かうと言ふ聲におどろいてそこを立
去つた。

小鳥の死(賞)

滋賀縣野洲郡兵 那須富子
主村兵主校高二

昨日の夕方學校から歸つてみると、可
愛い小鳥は籠の隅に冷くなつて死んで居
りました。五日前に兄様が林で捕へて、
餘り可愛い小鳥でしたから籠に入れて置
いたので。餌をやつても水をやつても
ちつとも食べませんでした。空が戀しい
のが、空ばかり見つめてはたたくして居
ました。小鳥はながく餌につきにくい
ものだ。餌さへ食べると好いけれど、と
お父様が言つてました。やはり小鳥は餌
を食べませんでした。それで軀が弱つて
しまつたのでせう。こんな事なら逃がし
てやる方が好かつた。と思ひました。仕
方がないので、庭の隅へ小さいむくろを
うめてやりました。

しろばんば(賞)

山梨縣大月小 宮時子
里東小學校

秋の短い日はもう暮れかかつた。町は
暗く、淋しく電燈が光つてゐる。空はうす
黒く雨でも降つてきさうだ。しろばんば
こい、雪をしようつてこい。小さい子等が
箒を持つて面白さうにしろばんばを追ひ
まわつてゐる。體に雪のやうな白い物を

つけたしろばんばは、雨でも降るのか一
つばい飛んでゐる。高く低く箒の追ふの
を逃げまわる。私も取つてみたくなつた。
かつちやん達は私のそばに来て「取つと
くれ〜」とせがむ。私は手を出来るだ
けひろげて、中でも大きいのを取らうと
思つてびよんと飛び上つた。そして手で
はたと落した。白い物がすゝと地上に落
ちた。よつちやん「あつ、おくれ。」私は拾
つて、よつちやんのお
かつばさんにしてゐる
頭へつけてやつた。髪
へつければ黒くなるさ
うだ。あれあんな所を
時ちやん取つて。私は
「どこ」と言つてかつ
ちやんのゐる方を見
ると、小さいしろば
んばが低い所を飛んで
ゐる。私は手をひろけ
てはたかうとしたがす
ゝと行つてしまつた。



おばあさん(賞) 愛媛縣越智郡富日 廣文代
岡村舞事尋六

だんく〜しろばんばが
ふえてきた。丁度こま
七九

なんまんえ——
はだしでしたところ
がついでく。

評、ナント元氣な肴屋さん。(牧水)

霜

新潟縣中頸城 増林 正義
郡妙高校尋六

霜がおりたよ、うちの裏の島へ
二寸ばかりの霜がおりた
そこへ

猫の足あとついてゐた。

評、面白い調子だ。(牧水)

晝

東京市麹町區 井安子
土六校尋四

しづかな晝のことでした
小さな晝が死んだのは
しづかな晝のことでした
小さな晝がしんだのは
しづかな晝のことでした
小さな晝がしんだのは
しづかな晝のことでした
小さな晝がしんだのは
しづかな晝のことでした

評、歌と賦に解かです。(牧水)

る す 番

大阪府東成郡 塚義博
小路校尋六

僕が家庭にいくと

ねずみが

一びき

あそんでた。

評、可愛い、チヌチヌ。(牧水)

す ズ め

香川県綾歌郡 浦今一
松山校高一

風もないのに
ささの葉が動く
葉陰にすゞめが
とまつてる。

新 米

新潟縣中頸城 竹内よみ子
郡妙高校尋六

今朝は新米たべられる
家中おぜんに向つた時
ごはんのふたをとりました
ゆげがほう／＼たちました。

鳥

かな雪が降つてゐるやうだ。私達はうれ
しくてたまらなくなつて、一生懸命には
なまはつて取つた。

馬がこけたこと

愛媛縣越智郡 阿部 早子
富田校尋六

私が學校から晝食に歸つて、御はんを
たべやうとしてゐると、となりのりーち
やんがあわたしくかけこんで来て「は
ーねえさん、あのー、うちのうらで
のー、馬が死んだらいいの。」と色をまつさ
ほにして言つたので、私が「ほーかんい
てんよ」と言つて走つて行つて見ると、
死んでもどーしても居ません。まだ丈夫
で目をあげたりつむつたりしてゐました
馬主さんと、とこ屋のおいさんとが一生
けん命で馬をおこしてゐました。馬主さ
んは後足へなはをひつかけ、床屋のおい
さんは前足へなはをひつかけて、一二の
三とかけ聲をかけて、一生けん命で、うん
うん／＼／＼言ひながら、ひつばつ
てるますが、なか／＼おきません。馬主
さんは「これがなれとる所じやあつたら
すぐおきるんじやけんど、みぞじやけん

なか／＼おきん。」と言つて、一生けん命
でひつばつてゐた。私がおばあさんに、
「どしてこけたん。」「おや、なはまきが
したよ。」なはまゆうたらなんぞん。」し
らん／＼あつちいけ。」と言つたので、
私はとこやのおばさんの所へ行つて「な
はまき、ゆうたらなんぞん。」しらんあ
ののー、あの松の木へつないどつたんぢ
やとい、ほいたら、なはまきがしてのー、
こゝいこけこんで、え、おきんのじやと
い。」ほうかん。」と言つて見ると、一
生けん命でひつばつてゐるが、馬の脊中
のくらの、やうな小さなのをのけてやり
ました。そして又一二の三と言つて力ま
かせにひつばると、くるりとむきなほつ
て、馬が一こ忽ヒ、ーンとないたと思つ
たら、くるりとおきてヒ、ーンとないて
身をふるわせて草をたべはじめた。うち
のおばあさんが馬主さんに「あんたど
しよつたんぞん。」「こちかん、こちは
馬をその松の木へつないどいて、髪つみ
よつたんよ。」「そうかんもう大丈夫ぢや
のー。」え、ありがたうございまして」
と言つた。この時りーちやんが「ほーね

えさん、あらん、馬の脊中見とん、血がで
よる。」と言つたので見ると、ちやうど脊
骨の所が五十銭金位皮がのいてみが出て
血が出てゐた。

シヤボン玉

滋賀縣兵主村八 那須美枝子
橋本校一年

よしの先にシヤボン玉が、くる／＼ま
わり乍ら出来た。冬のお日様がうつつて

きら／＼光る。玉の中に自分の顔が大き
く見えたり、小さく見えたりしてうつろ
正ちやんは「もつと／＼。」と言ひながら
顔を真赤にして、よしの先を見つめてゐ
る。私もまけないで玉をこしらへた。玉
はくるくるまわり乍ら、ふくらんで行く。
ゆら／＼ゆすれ乍ら、まだよしから離れ
ない。思ひきつて、でもソートふくと、
玉はふんわりと離れてふわ／＼とんでゆ
く。やがてシヤボン玉
はバツと消えた。

冬のよる

群馬縣勢多郡荒
砥第二校尋六

細野陣三郎

時々物すごい音を立
てた風が家のしやうじ
にあたつて、がたんが
たんと言がする。私は
お母さんに「おそろし



お手玉(賞) 長野縣小縣 柳澤とし

櫻の木

新潟縣中頸城 那妙高校尋六 岸本サダ子

家の前の櫻の木

雪にのられてかしがつた
妹がいつておとしてやつたに
また今朝までにかしがつた。

初霜

山梨縣北巨摩郡 小淵澤校尋四 進藤かつ子

ゆふべはほんよきにさわかつ
と思つて庭へ出てみたら
大下のやねに、
霜しろじろと

杉のかけがのこつた。
かなしい

茨城縣原田郡 若柳校尋六 吉川たみ子

落葉がだんぐちつて行く
私も少しで
卒業だ
落葉を見ると
かなしいな

馬

山梨縣北巨摩郡 郡富里校高一 武藤 壽

ヒシヒシ
うちの馬も
おどろいて
聞耳立て、
フンカンフンカン。

どこかのねえさん

山梨縣北巨摩郡 小淵澤校尋四 進藤やすよ

どこかのねえさん笠持つて
頭をおさえてとんで行く
てぬぐいかぶつてとんで行く
たんほの方へとんで行く

本屋

新潟縣中蒲原 郡新津校尋六 石月のぶ子

本屋に新しい
本が来たら
本屋が明るい

山の上から(賞)

芝原三田 鈴木利明



八画
の出来事は一週間ほど前の事
です。私は夜お手習をしてる
ましたら、とつぜん四疊半か
ら「キヤツ」と言ふ驚きの聲
がすると、もに女中が私の所
へとんで来ました。内の者だ
ちはびつくりして女中にきく
と「四疊半になんだか黒い物
がみましたよ。」と息をはつま
せながら、答へました。その
時私はすぐあの黒猫だと思ひ
ましたから、お母様に「それ
はきつと黒猫ですよ」と言ひ
ますと、皆大笑をしました。

きせん

茨城縣稻敷郡 本原校尋二 柴沼榮一

ちめ足早にあるひて行く。ほんたうに寒
い朝だ。荷馬車の馬は鼻から白い息を出
しながら行く。僕も學校に行く時にいろ
りのはたであたつてから行く。學校まで
行く内に、手がつめたくなつてしまつた。
まよい猫
東京市淺草區 秋元秀子
待乳山校尋五
どこからまぐれこんで来たかわかりま
せんが、家には一匹の黒猫が居ます。こ

た。私は誰か仲間がくるまで、お客さん
こなければよいと心の中で思つて居た。
後にゐる鷹谷先生は、老人が来たら、てい
ねいに案内をしないと云つた。私は早
く案内する人が来ればよいと思つた。其
の内に一人のおばあさんが来た。おばあ
さんは入場券を持つて来て、ここへ入場
券を置くでつかと言つた。私ははいと言
つて、其のおばあさんに向ふの方へ案内
した。一度案内すると、もう少しもいやで
なかつた。それから幾度もく案内した。

接待

山梨縣北都留郡 廣里東校高二 渡邊きよ子

早く風がやめばよいがなかく、やみませ
ん。乗つてゐるお客さんも、するぶんお
そろしいでせう。
私はお客さんを案内するのがなぜかい
やだつた。始めの内は大勢ゐるから、仲間
の人達が案内した。だんぐ仲間の方は
お客さんをつれて、向ふの方へ行つてし
まつた。しまひには、私が一人きりになつ

秋の夜

東京麹町區 城井安子
上六校尋四

お父様が昨日から、おかせ
をめぐらして、おやすみになつて、
お父様が「安子、だいたく
さんだ。ありがたう。」とおつ
と思つて、たち上るとたん、
あまどのすきまから、月の光
がチラチラとつりましました。



少女(賞) 小石川區高田 高木しげ子
老松町一六

講演の旅より

伊香保にて

講師 沖野岩三郎

十一月廿四日の午後十時から福島市の公開堂で、私は家庭教育と童話について一時間講演をしました。私の前に四人の人達が講演したので、もう私の番になつた時は聴衆が半分位しか残つてゐませんでした。しかし残つた人達は皆な終まで拍手を送りつゝ、静聴して下さりました。

廿五日の朝は師範学校の講堂で、市内の尋常六年以上を皆な集めて話しました。千五百人ばかりの切つて揃へたやうな、活々した子供さんばかりで、大層愉快でした。皆な破れんばかりの拍手をして聞いてゐました。

へ行きましたが、十二月三日に、伊香保を立つて信州の望月といふ所へ行きまし。碓氷峠を越えてみると淺間の山は眞白で實に美しくございました。田中驛で汽車を降りて、馬車で三里の間望月まで走りました。雪が悪いので馬車の中でお尻餅を搗いたり、帽子を飛ばしたり、いろいろの滑稽があつて、午後の五時頃に漸と宿へつきました。宿の名は曙屋といふのでした。寒いもんだから二階に火爐が切つてありました。御牧小学校の高見澤先生や、望月の小学校校長さんが尋ねて来て呉れました。

八六
時から、望月を中心に近所の小学校八ヶ校の五年生以上が千五百人程集まつて、一時間童話を致しました。夫れから御飯を食べて、午後の二時から今度はお伽ばなしを致しました。三時半に閉會しましたが、二里三里の遠い所から来た生徒さん達は皆な喜んで聞いて呉れました。田中驛へ着いたのは六時前でした。丁寧な傳屋さんは汽車の中まで送つて呉れて、別れました。

金の星講演部規定

金の星は新しい時代の童話と童話を普及するために講演部を設けてあります。講師は、童話は沖野岩三郎先生、童話は野口雨情先生が擔任されます。童話なり童話なり御希望に應じて講師が出張致します。講演は先生方のお仕事の都合上、なるべく十五日から二十五日までの間に制限いたします。講演をお望みの方は、東京市外田端三五〇番の星社へ御車込み下さい。お問合せの費用は返却いたします。

金の星誌友の創作を募集します

「金の星」はこの二月中旬、童話童話並びに児童創作の研究雑誌として毎月四六版四倍大の雑誌「小馬」を發行いたします。「小馬」には「金の星」の顧問、同人は勿論の事、その他の「金の星」關係の諸先生が毎月執筆されます。就ては下に記した規定に従ひ、特に「金の星」誌友の創作を募集することにいたしました。どうぞ奮つて皆様の面白い作品を御投稿下さい。

- 規定……は凡て「金の星」の創作募集と同様です。
 - 幼年詩……野口 雨情 選
 - 自由畫……岡本 歸一 選
 - 綴切……齋藤佐次郎 選
- 毎月二十五日

「金の星」誌友の新特典

「金の星」誌友の方々へ

「金の星」は皆様の力強い御聲援を得まして、成長して参りました。まことに皆様に對してお禮の申様もございませぬ。そこでこの度、皆様に對して少しでもお禮の心持ちを表したいと思ひまして、こゝに「小馬」を創刊いたしました。「小馬」は童話童話をはじめ、自由畫、幼年詩、綴方等兒童の創作の研究

究雑誌であると同時に、また誌友の皆様の機關雑誌であります。これによつて私どもは皆様と共に青少年の讀物の研究のために盡したいと思ひます。従つて「小馬」募集の創作は、誌友の方に限りがありすから、誌友の方だけに限りました。そして、誌友の方には毎月無代で「小馬」をお送りいたします。尚、わしくは新たに出來ました誌友規則書に記してありますから、お入用の方は本社へ申越して下さい。

金の星社

澤山で、いづれも揃って聞かやうな出来事です。今月も殆ど同じ程度が出来た。えの作だったの、阿部早子さんの「馬がにげた」とを一つ取りました。これも前に述べたやうな次第で紙面が足りないのが、いゝ作であり乍ら全部のせられないのが甚だ残念です。たゞ一つに、富田校の作品に就て気がつく事は、一體に作風が、いゝまん事です。何も彼も皆な残さず書いてしまふといつた風なので細く書いてある割には、読んで後頭に残らないのです。この處を一つ考へて見て下さい。



△幼い人達の作になか／＼いゝのがありました。細野陣三郎さんの「冬のよる」などは、ごく短い文ではあるが、寒い冬が来て、毎日つめたい風がヒュー／＼吹く有様がよく書けてあります。山中龍吉さんの「最もおもしろい事」も同様な意味で、く書けてあります。(齋藤生)

童話選評

齋藤 佐次郎

△例によつて澤山の童話が集まりましたが、今月ばかりに昔から語り傳へられ過ぎてゐるので、幾分か多量に集つてゐるやうですが、尤も多少筋に變へたところはあるやうですが、大體が有名過ぎる話に似てゐるので止むを得ません。しかし、中々しつかりと書けてゐます。忠七さんの冬枯の方は子供らしい純粋な味が豊かに出てゐて面白いものだと思います。前半の方は少し過ぎ過ぎてゐると思ひますが、後半の方は、後半の方がよく行つてゐました。

◆金の星出版部より◆

野口雨情先生の「童話十講」に就て

「金の星」出版部は着々と模範的書籍發行計畫してあります。二月はじめには野口雨情先生の苦心の名著「童話十講」を行すことになりました。只今印刷を急いであります。皆様も御存知の通り童話に就て書いた著書がこれまでに餘りありません。これ程著書が盛んなのに適當な研究書がないのは、まことに残念でなりませんので、金の星出版部は特に野口雨情先生にお願いして、童話の全部に亘つて優れた佳作の一つに数へられるもので、△松尾さんの「出世した泥棒の話」も注目されました。無理でなく皮肉が生きて働いてゐます。△土橋方さんの二つの作は題材が思はずなでした。折角の努力が十分に發揮されませんでした。△羽鳥精一さんの「馬の玉子」、子供は喜ぶかも知れないと思ふ話ですが、品が足りないの

が残念です。原材の選擇にと對一考を願ひたいと思ひました。△伊藤さんの「狼が月に吠える話」は例によつて頗る簡潔な筆でキビ／＼と書かれてゐますが、あんまりキビ／＼過ぎて童話としての味に乏しいやうに思ひます。これさへなかつたらこの作者は非常に面白いものが出来る人だと思ひます。△次に今月の少年少女の自作童話に就て少し

月ばかりに傑出してゐるといふ程のものを見出なかつたのが残念です。澤山の中から先づ次の諸作を佳作として挙げました。
「瘧」とり「山のお家」栗の懇親會「冬枯」も「おもしろい」出世した泥棒の話「兼賣の殿様」「おもだかと蛙」「馬の玉子」「オチ」「なまくら」「茶屋敷」「狐」「ばけそこなつた小狐」「狼が月に吠える話」「森の中」「桃太郎の話」「小犬」とろ種とお話「甚兵衛さんと小狐」等△この中で最もまとまりがよくおもしろい、筋をはりよく、節をはりよく、庭にまつて、北田初子さんの「瘧」とり「山のお家」を挙げました。新編と「歸り」とでもいつたやうなお話で先何處かの國に生かす筋が語りで傳へられてゐるので、うが、鬼のやうな話、瘧とりのお話は別が本家だと聞いてゐますが、これが言ひ傳へられてか随分各國にあるやうです。恐らくこの「瘧」とり「森の中」の一つだらうと考へられます。
△牧野真砂子さんの「御弟様揃つて光つてゐました」童話も面白く、十分すぎる話は、例によつて面白く讀まします。一燈、「瘧」とりのお話は別が本家だと聞いてゐますが、これが言ひ傳へられてか随分各國にあるやうです。恐らくこの「瘧」とり「森の中」の一つだらうと考へられます。

- △不思議な曲(齋藤生司) △山の云ふ石(牧野真砂子) △山のお家(土橋方) △栗の懇親會(土橋方) △馬の玉子(羽鳥精一) △悪狐(立花清) △茶屋敷(寺島西男) △兼賣の殿様(寺島西男) △森の中(K.T.生) △桃太郎の話(柴田利郎) △オチ(伊藤章三) △おもだかと蛙(須賀芳子) △小犬(齋藤三三) △おもしろい(長谷川マツ) △甚兵衛さんと小狐(三本松清明) △名譽の選手(内藤俊亮) △金色玉(翠村生) △狼が月に吠える話(伊藤一雄) △吹雪の夜(山田三郎) △なまくら(松本松枝) △ばけそこなつた小狐(加藤作二郎) △哀れな孤兒(土橋方) △親子の夜(中尾猶之) △或る夕方(酒井樺花) △白き城と大工源兵衛(藤久昌朗) △飛行機(瀧川初太郎) △クリスマスの前夜(永橋卓介) △正直正徳(廣岡愈) △美代ちやんのよるこひ(小林みつ江) △山味(吉村風村) △熊が恩を返した話(安田よしを)
- ◎第二部 △塔の中の饅頭(内藤わか子) △須美ちやん(松本せい子) △金の栗(中澤木雄) △和子さんの夢(小澤たか子) △少年の手柄(梅田三良) △マ、星と子星(小澤幸子) △のぞき(柴田美緒) △神様のお願い(梅田龍子) △義とやんの話(清水正雄) △欺された三吉(田中正一) △後の浦島(南原静也) △背中の目のある先生(鈴木一郎) △汽車ガッパ(高橋ひさ誌) △小雀(鎌田一男) △怒張りなお希(内本誠一) △小雀(鎌田一男) △大塚好之(柴田太郎の改心(失名) △兄弟(里田徳) △鬼(齋藤生) △海軍の三太(池田龍太郎) △あれれん(川村幸子)
- ▽第二部 △あたいらの(あたいらの) △朝もやう(古橋文武) △星とがん(住野十七) △秋が来た(戸田政治) △海の中(金井豊治) △秋晴れ(松吉勇吉) △小川(山川藤一) △山彦(吉田チヨ) △雀(木村寛一) △豆(川島新) △のみす(平井茂) △影(佐々木菊雄) △み、子(宮内勇) △汽車(熊野元俊) △雲(佐藤勝美) △こんにやく(谷本松) △秋の日(紫野實) △夕方(清水茂) △雨(杉島正一) △から(櫻井出) △ガッパ(鳴島新造)
- ◆自由畫掲載外佳作 △キユーヒ(山田明) △體操の先生(神崎實) △ウメ(佐藤龍美) △教室の歌(岡島眞理) △カみゆひ(柳澤とし) △寫生(竹内品) △鬼(龜田龜松) △鈴とけい(橋爪謙吾) △ナシとリ(ゴ) △伊藤登良男 △藤庭(福島玄一) △鳴物(長野英夫) △柿もぎ(黒住豊之助) △お父さん(高木しげ子) △鏡の中の私(伊藤郁子) △はらの花(中館みゆ) △僕の家(岩下五郎) △私のすきな花(佐藤喜久代) △花(岩下五郎) △魚つり(田中稻穂) △マリチヤン(新

をみん自作童話ばかりにしなければなりません。これはちよつと出ない事です。しかし、追ひ／＼と面白さをさがして是非出来るだけ面白くせませう。

皆さんと同じ様に、私まで又一つ歳をとつてしまひました。全くヒカンします。だつてだん／＼お爺さんの方に近くなつて来るのですもの、嬉しくはありませんよ、皆さんみたく

◇通信

岡本 歸一

誌友規則改正

「金の星」誌友規則は今度大改正をして、これまでよりも一層特典が多くなりました。先づ第一に、誌友には無代で童話、童話、幼年詩、綴り方、自由畫の研究雑誌「小馬」をお送りいたします。「小馬」は研究雑誌であると同時に誌友の機關雑誌でもありますから、誌友に限つて各部募集の文藝に投稿することが出来ます。この外、雑誌代も誌友には特別の割引があります。

この際、是非誌友にお入り下さいませ。新しい規則書はお申込み次第お送りいたします。

前だけを擧げて置ませう。

後の浦島(少年の手柄(梅田三良)マ、星と子星(小澤章子)塔の中の姫(内藤わか子)のぞき岩(柴田善精)神様のおくりもの(梅田静子)お友だち(高田静子)雀の油鳥(南須原静也)背中に見えぬ(鈴木一馬)贈られた三言(高田静子)

い。でも皆さんはいくつになつても「金の星」は止めないで下さい。「金の星」は年をとる程立派になりますから、年の初めにお願ひしておきます。

が運れると全く発行日に出た事はないと思ひます。いくら此れられてもしかたありませんと皆さんから大目玉、主幹からお小言、たうとう一年中叱られどほしてました。今年も発行此れられないで、主幹にお願ひして水島爾保布先生に繪をお手傳していただく事になりましたので、「金の星」に又一光が加つた事になりました。それで今月からは「チャン」と発行日に出る様になります。

す。「金の星」獨特の面白い附録ですから岡本先生の挿畫と共に大評判になる事と存じます。△藤澤先生の「釋迦物語」は新年號から載る方になつて来ましたが、あまり長篇物ばかり澤山になりましたので、一時掲載をひかへて、三月號から譲取りもで例の通りの面白いものを書かれた事になりました。

水島先生の繪も多分讀者の皆様が御承知でせうし御存じのないかたも、今月からの御覧になればきつとお上手なお小言になるでせう。一應誌上で御紹介いたしておきます。私も御小言頂戴しなくてはなりません。

△金の星社が大正十二年度に大活躍をいたす決心で、別項で記した通り、特に誌友の方だけの機關雑誌として「小馬」といふ美しい雑誌を發行して無代で差上げることにいたしました。此の際誌友にお成りになります、新しい／＼の御便宜がございますから、是非お入り下さいませ。

先月の繪はなしの釜井君が自分の事をおまけなつて出したと、かん／＼に怒つて来ましたが、驚つておまけな釜井君の御話を御紹介いたします。それを讀んで吹きださない人にはお褒美を上げてほしい位の話です。

編輯室より

△本月號は西條先生の面白い童話の外に神野先生が例の「山六爺さん」を一層面白くした「鈍栗山」が、いよ／＼本年度の附録としてはじまつたので大層にぎやかになりました。尙西條先生の「西班牙の山賊」は實に變化のある面白いお話です、それに随分長いお話ださうですから、さぞ皆様に迎へられることとせう。

△野口雨情先生の「童話十講」が本社出版部から近々に發行になります。これまでにない研究書ですから大評判になります。△尙皆様に喜んでいただく事があります。それは二月號から挿畫の大家水島爾保布先生の「金の星」のお書き下さる事です。水島先生の畫は岡本先生と一つしに皆様にこそ迎へられる事でお願ひいたします。

◆金の星新誌友

- 納(フミ子) △ラン(久保田京子) △山と舟(岡本義夫) △福田さん(今井君子) △私のお人形(加藤茂子) △河野の月(田中正) △ホウシ(小川省吾) △器物(磯清) △景色(熊田満佐吾) △土瓶と湯呑(細見順) △唱歌のおけいこ(砂崎三五子) △ペンとインキ(米良優子) △母(葛城嘉代子) △風景(鈴木鐵藏) △家の外(山本貞夫) △日暮れ(鈴木カネ子) △栗三ッ(鈴木利明) △僕(田中伊三郎) △原より屋敷の景(吉村) △野原(紫沼てい) △いんくびん(高久忠) △チャレ(森田愛子) △兄さん(深谷達也) △人物(平野好子) △何書かうか(瀧隆雄) △寫生(蓮池榮治) △茶碗(小島作次郎) △私のおばあさん(戸部田子雄) △机の上(柴田美緒)
- ◆幼年詩掲載外佳作 △夕空(緒方マコ子) △夕やけ(濱田光子) △朝(山本みさ子) △菊(古屋いさ) △まきわら(廣江せい) △菊(土井眞澄) △あり(塚本まさ) △猫(橋野榮吉) △私の學校(荒井貞子) △舟(吉田義久) △秋の夜(安月岩次郎) △秋(鳴島新造) △夕(喜内義一) △まがら(柿沼さいち) △父さん母さん(清水浩一) △水島麗居(カガミ) △鈴木ヨスエ △アボラのかげ(森さだ子) △しぎ(成瀬賢三) △一人ぼっち(渡邊夏子) △風(島居賢三) △ほぶぶす(小林まほ子) △赤とんぼ(白岩雄) △山(山地武平) △あめ(赤坂まよ) △竹山(程緑久吾) △成る朝(橋野唯夫) △花立(守田マコ子) △一(池田武次)
- ◆贈り物掲載外佳作 △箱の中の水汲み(坂坂あき子) △運動會の日(小宮とよ子) △學校から(つて(岡田スミエ) △恐ろしかった時(日澤文代) △見つけ(福村貞夫) △馬(小島作次郎) △父の歸り(瀧隆雄) △里の夕暮(大池逸郎) △お産の真似(新津眞佐枝) △私のカバン(山崎トモ子) △私の家(伊澤光子) △島へ行つて(葉梨三郎) △私の間の夜(竹中サカエ) △ペンとインキ(永榮米子) △もつた鼠(安井貴) △僕の植木鉢(市野亭) △じんだんぼとり(栗野福二) △学校里(相澤宇平) △から(鳩もと) △すなとり(高野邦夫) △大ころ(佐々春) △くり取り(高野邦夫) △大ころ(佐々春) △くり取り(高野邦夫) △花やん(中村富次郎) △朝(小田順) △花やん(中村富次郎) △根岸の夕方(若尾美子) △共進會のおた(伊谷芳子) △飛行機(大塚好之) △朝(神戸千鶴枝) △私の松の木(津留瀧雄) △昨日のるすばん(春野源次郎) △煙草(柴田美緒) △二人の子供(木あ) △學校やっこ(清水愛子) △晩秋の夕暮(鈴木幸雄) △昨日の夕方(元木茂雄) △メケボ(那須野鶴一) △星の光(宮下源一) △朝の感事(美根しげる) △雪の朝(岡口富雄) △夕立(吉村兼吉)
- ◆金の星新誌友 ○秋田 加藤和一郎様 ○廣島 牧野忠之様 ○東京 恩田房子様 ○北海道 佐藤鏡二様 ○東京 大澤住江様 ○東京 櫻本鳩雄様 ○大阪 瀧村てい子様 ○三重 熊澤正様 ○廣島 日下一三様 ○東京 鈴木利明様 ○東京 伊藤はな代様 ○岡山 宮岡孝太郎様 ○愛媛 木原信雄様 ○山梨 土屋梅枝様 ○栃木 藤田幹様 ○福井 松本ち(子)様 (以下次號)



リよだ者讀

▼「金の星」エハガキ有難く戴きました。日一日と寒さが加るので田端の編輯局ももうすつかり冬でせう。私は「金の星」の美しい光に守られて、新しい春を迎へようとして居ります。(千葉 染谷秋月)

▼僕もみな様の御れつしんについて「金の星」の愛讀者となりました。此の間は、きれいな僕のほしがつてゐた。「金の星」エハガキをたくさんお送り下さいまして何んとお禮を申してよいかわかりません。僕は六歳七歳のころ子供の友とか幼年の友とかを取つて、二年生のときは幼年世界、三年の時は小學男生、と云ふやうに見ましたが、何んと言つても「金の星」が一番人気に入りました。あのエハガキの「春が来た」のゴドモが、しん子に居るのときと云つてはがた大そう気に入つて居ります。また十二月のへうの繪はあたにかい家庭に生れる子供のせいかがみえてなつかしくありました。(長野小野川 久保田正文)

▼明けましてお目出度う御座います。「金の星」もいよいよ五つになつたのです。今年も童話童謡の世界にさんざんと輝いて下さい。寒さの折りに「金の星」諸先生の健康をお祈りします。(熊本 田中正一)

▼これから四方の讀者をりを一しよに入れて出してよいのですか。お知らせ下さいませ。やうやう。(秋田明治小學校 大日向さよ子)

▼こんなんでもしよ、御投書下さい。讀者便りでもないで、しよに入れて差支へございませぬ。(記者)

▼学校から歸つてみると、まあなんとうれしことですか。きれいなエハガキと立派な賞品。先生ありがたうございました。(御壯健をいのります。秋田市 大橋正憲)

▼昨日、中央會堂の「音楽と時と童話劇」の會へ参りました。沖野先生の童話は本當に面白うございませぬ。私は夢中でお聞きしながら一生懸命に沖野先生のお顔を見て頂きました。先生お歸りになつてお顔に欠がいてゐませんでしたか。出口で美しい「金の星」エハガキを頂いて飛び上る程嬉しいございませぬ。(半田區東横町 南須原祥也)

▼こんど野田雨情先生の賞品をいただき、童話雑誌「お月さん」を發行することにになりました。刊行は大正十二年一月一日に發行いたします。清規をお望みの方は二錢切手封入御申込下さい。すぐ御送附いたします。(大阪市東區中本町中道二八 お月さん社)

▼觀衆はごまめいた。行司は黄色い服を返り上げて「ヒガシ、キンノホシ、ニシ、キンノホシ」と名告りをする。重々しい趣に燃然と輝く星をつけた「金の星」は勇躍をひびきかけて土俵に上つた。觀衆は又も拍手をあびせかけた。片や「金の星」は波の上に狸の土船を描いた題をだらしなくしめおつくと

○頭と足とだけの從五位様、なんと言つても大家だけあつてぐんぐん引込まれた。○私(オチ)の生立、作者が少年だけあつてなんとも云へない、むちやきさにみちて居ります。○橋の上、上品な、ふばなしでした。○家なき子、相變らず面白く讀みました。これですと残念な気がします。○時計御殿、新進童話作家だけに大變面白く拜見しました。○ホントとワリ、この話はよく話して、双兒でなく老兵士の時もあると思ひます。さうが小島先生の筆は一段とつて居ります。○ちんば、推薦童話は毎號一つとして面白くない作品はありません。こんどは少しセシメンタルな個所がありますが、可愛らしいもの、優しい好讀物でした。(都外川 淳)

▼私等のクラスが宮原校長先生、原田先生、由利先生に連れられて、仙臺、松島方面へ修學旅行に行つたとき、ぐんぐん野田雨情先生のお目にかつたことがあります。私はあのときのことを今でもはつきりおぼえて居ります。學校では野田先生を知つてゐない者は一人もありません。日本一の童話の先生だとみんな云つて居ます。(宮城 一誌友)

▼毎月一回出る星は、びかりと光る金の星、海のはてまで、光る海山のはてまで、光る毎月一回出る星は、びかりと光る金の星、海のはてまで、光る海山のはてまで、光る毎月一回出る星は、びかりと光る金の星、海のはてまで、光る海山のはてまで、光る

土俵へ這ふやうにして上つて来た。それでも行司が今一度黄色い星をおり上げると船もやつきとなり、星と對ひ向つて互ひに、こをふみ腹をふつて土俵の真中へ渡された。金の船



(新海師範學校に於て講演中の本誌講師 野田雨情先生)

矢張り突きかゝつて来るを思はく受流しガツシと四ツに組むや星如何なる隙を見出したか「ヤツ」と一降下手投をうては船塔らす土俵の外へ投げだされた。ドツと起る歓聲、キン

んよ」と云はれ、すしおそく行く」と「金の星」はもう賣切れましたよ」と申されました。どうかお手数でせうが次號から郵便で送つて下さいませ。(大阪 瀧村てい子)

▼皆様に御禮を申し上げます。すみれへ澤山のお作品をいただきまして大へんによるこんで居る次第でございます。さて此度「すみれの唄」と云ふ童話を作りましたがよい曲があるんで困つて居ります。どうか作曲をお送り下さい。お禮をさし上げますからすみれへ二錢切手封入。

すみれ、すみれ、よい花咲いたすみれが咲いた 野原に咲いたすみれが咲いた お山に咲いたすみれが咲いた すみれが咲いた(神戸市築本通四丁目 高橋ひさ子)

▼私の大すきな「金の星」のみんなの先生、さむくなりましてお元氣ですか。たうとう今年の「金の星」もすみました。正月號のくるのが待ちどろしくなりません。岡本先生はどんなきれいなふなをかくて下さるでせう。それから沖野先生のお話や野田先生のどうえうなど思へば思ふほどうれしくなります。どうぞ私も姉さんと同じやうに誌友にして下さい。これからせしよ、投書いたします。(鳥取 伊谷芳)

▼記者先生、大へん寒くなりましたがお變りございませぬ。私はすうつと前からの愛讀者でございます。お便り上げるのは今始めて御座います。これから一生けんめいつくつてたくさん投書するつもりで居ります。

ノホッ」一風にも多大な賞品の差だつたにしようらしい。あ、勝つた、たうとう勝つた。觀衆の期待は満たされた。熊本 田中正一

▼私の受持つてゐる生徒も大變「金の星」を好んで居ります。あゝして粗野であるやうなお猿にツバキを引かけて平氣であるやうな心が、だん／＼やさしい、しやかな、世界的愛に變つて行くのを見て、ひそかに喜んで居る一人でございます。どうぞ今後とも幾重にもお導き下さいませ。(朝鮮大邱 本町小學 岡村菊堂)

▼私の兄さんは去年の八月まで村の學校で、私の教を教へて居ましたが、九月から急に本校の方へ行く事になり、やはり五年を受持つて居るさうです。そして毎月「金の星」を私の所へ送つてくれます。兄さんが居なくなつてはんとにさびしくなりまして、けれど私は「金の星」を兄さんと思つて、何より楽しみにくりかへし／＼讀んで居ります。そしてお友だちにもかして上げます。

兄さん戀しいたづら小僧の

▼岡本先生、私は岡本先生の「葉ばなし」を毎月愛讀してゐる一人です。全く面白くて家中はすつと昔にお書きなつた「狐の仕返し」のやうなお話を忘れることが出来ません。先生是非あのやうな昔風の面白お話を書いて下さいませ。こんどは狸のお話でも書いて下さいませ。(東京 山口生)

懸賞創作募集

自由少年少女の創作
 山本 鼎先生選
 若山 牧水先生選
 編輯部 選

〔意注〕 課題は何でもかまいません。諸君の日々見たり、感じたりしたことや諸君の好きなものを、諸君の好きなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は學校や學年(または住所と年齢)とおとさないやうにしてください。用紙は自由紙になるべく畫用紙に、幼年詩や綴方はなるべく原稿用紙(または半紙)に書いてください。よく出来た方には「金の星」特製の賞品を差上げます。次號締切は一月廿八日(その以後は次號へ廻る)發表は三月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地の星社。

童話 齋藤 佐次郎 先生選
 野口 雨情 先生選

〔意注〕 童話は二十字語二百行以内、童謡は十五行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして入選の場合は、金の星賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

一般讀者の創作

定價 壹冊 參拾錢 送料 壹錢
 三ヶ月分三冊(送料共) 九拾錢
 半年分六冊(送料共) 壹圓八拾錢
 壹ヶ年分十二冊(送料共) 參圓六十錢
 但し四月號九月號は特別號で卅五錢新
 年號は四十錢ですから、御註文の節は
 この分だけ必ず加へてお拂込み下さい
 振替口座東京五九五六番

〔意注〕 御註文は必ず前金で御拂込み下さい
 送金に振替が一番便利で御座います
 の切手代用は(壹錢切手)一割増しです
 注 第何巻第何號よりと書いてください
 住所姓名ははつきり書いてください
 廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十二年一月六日印刷納本(毎月一回)
 大正十二年二月一日發行(一日發行)

東京市外田端三百五十一番地
 編輯兼發行人 齋藤 佐次郎
 印刷所 東京市小石川久堅町百八番地
 印刷人 大橋 光吉
 東京市小石川久堅町百八番地
 發行所 金の星社
 振替口座東京五九五六番
 電話 小石川五三三七番

九六

鈍栗山



沖野岩三郎

金の星 第三卷 大正十二年一月六日印刷納本 四年二月一日發行

山
猿

與兵衛爺さんの飼つてある、チヨンといふ猿が、馬屋の屋根で、日向ほっこをしてゐると、裏山の樫の森が、俄かにざわ／＼と動き出したので、ひよつとすると、自分の仲間ではないか知ら？と思つて、小高い丘の上にある柿の樹の枝から、
「おうーい、木の實は上出来ですネ。」と大聲で呼びました。これは人間が「結構なお天氣でございます。」とか「good morning」とかいふのと同じで、お猿さん達の仲間同志で使ふ挨拶の言葉だつたのです。

すると山の上からも、

「地面が見えない程落ちてゐますネ。」と云ひました。それも挨拶の言葉でした。

「僕はこゝに一人ぼつちでゐるんですから、皆さんも遊びに入らっしゃいよ。」

チヨンは親切らしく申しました。

「君の上つてゐる其の柿の樹へ行きたいと思つて、崖から此處まで来たんだが、何だか恐ろしくツて行かれないんだよ。」

大きな一疋の猿が、赤い籠を枝の間から見せながら言ひました。

「大丈夫だよ、僕ん所の爺さんは、もう一生鐵砲は射たないと言つてゐるんだから。」

チヨンがさう云ひますと、

「犬がゐるだらう？」と山猿は問ひました。

「居ないよ、大丈夫だから皆さん伴れ立つて降りてらっしゃい。皆さんに此の柿を三つづつあげますから。」

「君、かつぐんぢやア無からうネ。」

「僕だつて君達と同じ畜生ぢやア無いか。」

「だつて君は人間の家に棲んでゐるんだらう？」

「人間の家には棲んでゐるが、僕は人間の眞似はしないから、安心して來給へ、御馳走をするから。」

「では、僕達廿一疋連で行くが、きつと大丈夫だネ。」

【大丈夫だとも。】

そこで山猿の群は安心して櫻林から、ぞろ／＼と丘の處まで降りて来ました。

【皆さん、御遠慮なく、こゝへお上りなさい。】

柿の木の上からチヨンは言ひました。

【これこそ本當に、木の實の上出来ですネ。】

と親猿は言ひながら一の枝から二の枝へ上つて来ました。残りの廿疋も吾一に上つて来ました。

【兎も角皆さん、これを一つづつお食り下さい。】とチヨンが言つたので、山猿は大喜びで、眞紅な熟柿を一つづつ旨しさうに食べました。

廿一疋の山猿が熟柿を食べてゐるのを、ぢつと見てゐたチヨンは、もう餘程年をとつた一疋の雄猿に對つて、

【あなたは、あの鈍栗林で産れたお方ではございせんか。】と尋ねました。

【えエ、さうです。どうして君はそれを御承知ですか。】と雄猿は不思議さうに、チヨ

ンの顔を覗めました。

【僕も實はその鈍栗林で産れたんです。】

【えッ？ 本當ですか。】

【本當ですとも、僕のおッ母さんが、獵夫に射られた時、あなたもあの鈍栗林に居なすつたでせう？】

【あ、さうか、では君は雲林院様の息子かい？】

【はい、母の雲林院が獵夫に射られた時、僕はその脊に、シツカリ捉まつてゐたのでした。】

【さうでしたか、僕達はその時、君のおッ母さんの死骸を獵夫に渡すまいと思つて、随分追ツかけて行つたんだが、何を云ふにも、獵夫が、君のおッ母さんの死骸を川の中へ引込んでしまつたもんだから……】

【えエ、さうでした。僕も最うあの時、死ぬと思ひました。随分あぶく／＼水を飲みましたが、一生懸命に母の脊に、しがみついてゐたのでした。】

六
「さうでしたか、僕達は君も無論あの獵夫に殺されてしまったものと思つて、鈍栗山では毎年あの日を命日に、雲林院様と君との御法事をしてゐたんだよ。」

「それから一年ばかり経つた後で、獵夫の與兵衛は、鈍栗林の下へお魚を釣りに行きましたが、御承知ではございませんか。」

「獵夫が魚を釣りに？ そんな事は無いでせう？ 魚を釣るのは漁師でせう！」

「いや、此邊では獵夫でもお魚を釣るんです。獵夫の與兵衛さんは、お魚を釣りに行つて、水に溺れた猿を一定助けてあげた筈でした。」

「あ、あの竹竿を投げて呉れて……」

「えエ、さうだそうです。」

「それは私でした。私が助けられたのでした。ね、法性院さん。」

と云つて一疋の雌雄は、もう頭の毛の少し薄くなつた年寄の雄猿を見上げました。

「漁師が竹竿を投げて呉れたので、僕はそれを拾つて、あなたに握らせてあげたのでした。」

と云つて法性院といふ年寄の猿は、若い雌猿を見下しました。

「その時、獵夫の與兵衛爺さんは、僕を伴れて行つて、あの川原の處で、あなた方に僕を渡さうと云ひましたが、誰も伴れに来て下さいませんでした。僕も爺さん、馴れてゐたから山へ歸りたくも無かつたのですが、」

「さうく、さう云へばあの時、爺さんが子猿を肩に載せてゐた。君だつたのかい、あれは？」

法性院は呆れてゐました。

「さア皆さん、もう一つつ柿をお食いなさいまし。それからお話を致しませう。」

チョンが親切さうに言ひましたので、一同は喜んで又た熟柿を一つ宛食べました。

「人間の處に猿があるといふ話が、山の奥へ傳はつて來たので、多分嘘だらうと思ひながら、櫻林までやつて來て、よく見ますと、全く君が居るんでせう。どうかして出て會つて、人間の話を聞きたいものだと思つてゐる所へ、君から挨拶の言葉をかけて呉れたのでした。」

群の大將らしい法性院は、柿の種を吐き出しながら言ひました。
「私も、一度お山の猿に會ひたいと思つてゐたのでした。亡くなつたおッ母さんの事



を覚えてゐて下さるお方に會つて、いろ／＼其後の事をお話し申したいと思つてゐました。』

と云つてチヨンはホロリ！と涙を落しました。

「人間といふものは強いものですか、弱いものですか。」
小さい枝の上にいる小猿は訊きました。

「弱いものですよ、少うし風が吹くと、もうぶる／＼慄へてるし、少うし暑いと、直ぐ汗をだく／＼流すんですよ。それからよく病氣に罹るんですよ。」

「そんなに弱蟲だつたら、優しいだらうネ。」
瘦せた小猿は訊きました。

「弱いくせに、決してやさしくはありませんよ。あれでそれは恐ろしい事をやるんですよ。」

「どんな事をしますか。」

よく肥えた小猿は尋ねました。

「人間は、あんな顔をして、狼と同じやうに、獸を食べるんですよ。」

「マア！と廿一疋は皆な一度に言ひました。」

「御覽なさい、あすこし雛が居るでせう。あの北雛は近頃毎日一つづつ卵を産みますが、産むと直ぐそれは人間に取上げられるんです。」

「卵をどうするんでせう？」

頸の短い小猿は訊きました。

「其の卵を人間が食べるんですよ。鶏の赤ん坊が生きてゐるのを、其のまゝつる／＼と飲むんですよ。僕はいつも、人間が鶏の赤ん坊を飲むのを見る度に、ぞつとして身振ひをします。それから彼の馬部屋の馬も、牛小屋の黒い牛も、あの鶏の親も、今に皆な人間に殴り殺されて食べられてしまふんですよ。」

「あすこに居る、あの猫は？」

頭の大きな小猿は訊きました。

「あの猫は、餘程狡猾い奴で、毎日人間に、おベツかばかりしてゐるが、あれも今に殺されてしまひます。そして、皮を引剥いで、それで三味線といふものを造りますよ。」

「三味線ッて何ですか。頼の短い小猿は訊きました。」

「人間が歌を歌ふ時、使ふもんです。其時人間は酒といふものを飲みます。酒を飲んだ時だけは人間も立派に見えますよ。」

「どんな立派に見えますか。」

耳朶の、ちよッびり缺けた小猿は訊きました。

「人間は酒を飲むと、顔が赤くなつて、我々猿屬に少しく似て來ます。僕は時々酒を飲んだ人を見ましたが、其時だけ、人間も猿に近い動物だと思ひます。」

「人間には黒いのや白いのや、斑なのがあるやうだが、おれはどういふワケだい？」
額に疣のある小猿は訊きました。

「おれは、着物といふものを着てゐるんです。我々の毛皮のやうなものです。それを時々取替へるんですよ。」

「羽の生えた人間もありますネ。」

頼ッべたへ柿の種だの柿の種だのを入れた小猿は訊きました。

「おれは羽ちやアありませんよ。着物の袖といふものです。」

「何の爲に、あんなものを持つてゐるんですか。」

同じ小猿は訊きました。

「おれは丁度君の頼ッべたのやうに、食物だのいろんなものを容れて置くんです。柿だの梨だのが十も十五も入ります。」

「慾張りだね、柿や梨を十も十五も？」

前齒の一本脱けた親猿は笑ふやうに言ひました。

「人間は慾張りですとも。あんなに澤山なる柿でも稻でも、おれは持主といふものがあつて、誰彼なしに自分のものにするワケにはいけないんですよ。稻なぞは一人で、うんと刈取つて食へ積んで置くし、柿なぞでも、一人の人が皆な取つてしまつて、遊ッ柿一つだつて他人には與らないものですよ。我々猿屬のやうに、見付けた栗や櫻の實を、皆なで仲よく食へるやうな事は、人間には決してないんです。」

「そんなに一人で慾ばると、片方に食へられないで飢ゑる奴が出来るでせう？」

「さうです。猿には飢餓といふのが無いですが、人間にはそれがあつてゐるんです。」

「飢餓ってどんな物ですか？」少し個々の猿は尋ねました。

「飢餓ってのは、人間が何も食べられないで、お腹が減つて骨ばかりになつて死んでしまふのです。」

「お腹が減つて死ぬ？ そんな馬鹿な事があるもんですか。山の上から見ても御覽、あんなに澤山、柿だの稲たのがあるぢやないですか。おまけに人間は我々の領分へ粟なぞを取りに侵入して来るぢやアないですか。」

鼻の尖を少し怪我した大猿が、さう言ひますと、外の猿も皆な、

「腹が減つて死ぬ奴があるもんですか。我々は猿の仲間、そんな可笑しい事があつたと云ふ話を聞いた事がない。多分君は嘘を言ふのだらう。猿同志は嘘を言はないが人間の仲間に入つて居ると、猿魂が無くなるんぢやないかい？」

前歯の缺けた大猿は、小首を傾けながら言ひました。

「あれだけ田圃一面にある稲や、山に生えてゐる柿や栗を、人間が憎悪く分け合つて食べないといふ事は、とても君達には解らない。そんな人間心理に、僕が何と説明したつて、解るもんぢやア無い！」

チヨンも少しく不快さうに言ひました。すると、一番下の方の枝に居た小猿が、

「近頃人間の中には、狐だの鼬だのに、少うし似て来たのもありますネ。僕は此間山路を歩ける人間に、そんなのを見ましたよ。」と云ひました。

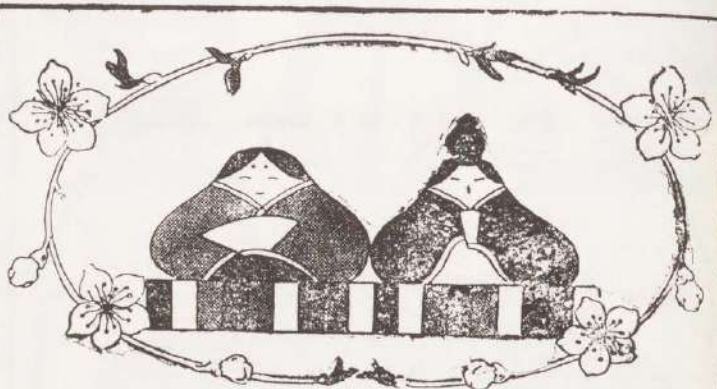
チヨンは暫く考へてゐましたが、

「いゝえ、それは違ひます。人間が狐や鼬になつたのぢやアありません。あれは首巻とか襟巻とか云つて、狐や鼬や貂の皮を剥いで首へまきつけてゐるんです。」

「さうですか、人間は人間でよかりさうなもんだネ。何も獸の皮を首へ巻いて、獸に成り度く候と云ふやうな眞似をしないでだつて。」

髪が薄い大猿は亂杭齒を剥き出しながら言ひました。

「馬鹿だネ人間は、山中何處を尋ねたつて、外の獸の皮を首へ巻つけて喜んでる獸は一定だつてありやアしない。」



雛人形陳列會

.....二月二日より四階の奥にて.....

本年新製の當店独自の雛を初めその他種々の變種や、附屬品の一式を潤澤に陳列致し、御用命の程偏に願上ます

◆梅見衣陳列
梅見にふさはしい、初春の助間服で綺麗な新衣裳を二月二日から二階に陳列致します

◆石川欽一郎氏澤敷展覽會
二月四日より、先生の澤敷中の傑作品を數多陳列



◆中繪畫展覽會
二月十三日より、風湖先生門下の傑作品揃ひの展覽會です

◆綿帶側陳列
二月十一日より實用的にて萬人向なるものを澤山に陳列

三越呉服店

東京市

.....二月一日が御休日にて休業 ◆ 日休日は二月廿六日.....

群の中で一番丈の高い猿は片手で枝にぶら下りながら言ひました。

「それからネ、人間は人間を殺すんだよ。」チヨンは舌打をしながら言ひました。

「そればかりは嘘だらう？」猿は猿同志、熊は熊同志、狼は狼同志、獸は皆な仲善くしてちやないか。僕は鈍栗山にするぶん永く居て、昔からの事をいろ／＼聞いているが、まだ猿が猿を殺した話は聞いた事が無い。君達は猪同志や鹿同志の喧嘩を見た事があるかい？」

大將の法性院は一同を見渡しながら言ひましたが、皆な、聲を揃へて、

「ありません、ありません。」と云ひました。

「それではネ、かうしませう。私は明日から、毎日此上の櫻林へ行つて、人間の事を教へてあげますから、皆さんも聞きにいらっしやい。」とチヨンは言ひながら、小さい欠伸をしました。

「アア、それは面白い。明日から櫻林の中へ人間の事を習ふ學校を作りませう。」と法性院は申しました。それから廿一日の夜を過ぎると、又か神を一つつつ食べました。

「アア、それは面白い。明日から櫻林の中へ人間の事を習ふ學校を作りませう。」と法性院は申しました。それから廿一日の夜を過ぎると、又か神を一つつつ食べました。

「アア、それは面白い。明日から櫻林の中へ人間の事を習ふ學校を作りませう。」と法性院は申しました。それから廿一日の夜を過ぎると、又か神を一つつつ食べました。

「アア、それは面白い。明日から櫻林の中へ人間の事を習ふ學校を作りませう。」と法性院は申しました。それから廿一日の夜を過ぎると、又か神を一つつつ食べました。

「アア、それは面白い。明日から櫻林の中へ人間の事を習ふ學校を作りませう。」と法性院は申しました。それから廿一日の夜を過ぎると、又か神を一つつつ食べました。

磨齒水ンオイラ

にほひの好い

ライオン水はみがきで、

うがひをすればするたびに、

お歯がきれいになります、

お口がきれいに

なります。

して、むしろも出来

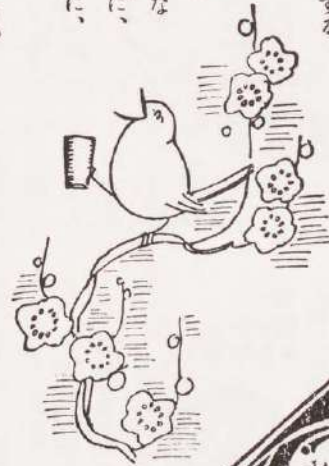
ません。流行感冒にもな

りません、夜る寝る前に、

外から踏つてきたときに、

さつときつと忘れずに

うがひをなさい。



大正十一年六月十三日
大正十二年一月六日
大正十二年一月一日
大正十二年一月一日

東京金の船社發行